

存在は核級、実際は癒し枠

wiguza

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ティアマトを甘やかしたい系男子になる一般人の話

目  
次

	1 : 経緯	2 : 経過	3 : 出現	4 : 把握	5 : 外出	6. 説明	7. 行先	8. 今後	9. 確認	10. 結果	11. 顕現	12. 管理
91	81	70	61	54	45	35	27	21	14	7	1	

# 1：経緯

「らー！」

「……お、おう」

いきなりなんだとかの質問はそれぞれ自粛してもらいたいが、今の状況を私が一番分かっていないので正直質問しないで欲しいでか質問しないで。マジで。

時は1時間くらい前（だつたと思う）に遡つてみるのよ。

――――――――――――――――――――――――――――――――

「いやーティアマトは強敵でしたね……」

「NKT……」

「エレちゃんの加護強すぎてワロタ。システム無しでもゴリ押せるつてなんなん。あとファムファタールたんはエロい」

時はそう、なんか徳あがつたAUOとか糞みたいな性格のキングメーカーなんだけど性能高い！　悔しい！　でも使っちゃう！

むしろ酷使してやれ！　と言わんばかりに使われる花の魔術師とかが出てくる「絶対魔獣戦線バビロニア」

実際の所ティアマト戦よりも道中の大量のラフム君だつたり、泥強化されて無限ぽんぽこする戦いの方が面倒だつたんじや無いかと言われる、あのバビロニアだ。そこらへんの話は人理修復するとか言ってたカルデアなる者たちからある程度聞き及んでいた。

聞き及んでいたと言う言い方をしていることからある程度察した人もいるかもしれないが、私はこの時代の人間だ。しかし転生者でもある。いわゆる無職転生に近い。千里眼と言うほどでは無いが、周りを見る目……詰まる所客観的に見るのが得意だと自負している。

何者かによつて特異点？　だか何だかにされ、最終的に修復されたら「多分こんな感じでいいんじゃない？」って感じで世界の修正力によつて戻される世界であるのだろう。知らんけど。

正直今考えると特異点もロストベルトもあんま変わらなそう。

しつかりとした考えなら別つて言えるだろうけど、結果だけ見ると両方とも大差なくない？ まあロストベルトは完全に無かつた物になるし、そっちの方が酷いんだろうけど。

とまあそこらへんの私の解釈は別としてだよ。問題はこここの事が解決された後なのよ。だつて解決されたし私もう用無しじやない？

その戦いでみんなが加護もらつてボッコしてたティアマトちゃんだけども。なんか体積めつちやいっぱいのケイオスタイル？ 混沌泥？ だかなんだか出してたやん？ ティアマトがちょうど倒された頃ね。私の頭：正確に言えば髪の毛かな。

被つちやつたんだ。その泥。

いやーもうダメかと思つたよね。ティアマトと戦つてるカルデアの誰だつたかを遠くから見てたらザパアーンとね。もう波のようにな。飲み込まれたあーと思つたら被つた所で止まつたんですよ。泥。訳わかめですよね。てか被つたら細胞レベルで変体すんじや無かつたつけ。タツチの差でセーフ？ むしろカルデアの召喚システムとかも結構何でもありのガバガバだからノーカン？ そんなー。

被つたらなんか髪の色がなんか銀色っぽいというか、艶のある感じというか。まあ簡単に言えばファムファタールに近い髪の毛になつた。ただロングにはなつてないぞ。ほんとだぞ。私変なところで嘘つかない。

まあ被つちやつた系男子になつた訳だけど。カルデアがいい感じに締めてさー帰るぞーってなるやん。修正力うんぬんで記憶とか操作されるはずやん。

なんかカルデアの者がいた時のあの血生臭い戦いの記憶とか泥の感じとか。

全部覚えてるのよね。

うん。可笑しいわ。どうなんだろうね。若干ティアマト入っちゃつて世界が手をつけられなくなつた？ わからん。

でも私自身非力だし、そこまで重要視されてないのかな？こうなつてから1年くらい過ごしたが、抑止力？ 代行者？ 的なのとは合間見えておりませぬ。

まあギリ生きてたというか、ギャグ路線のために急所外してた賢王からはちよつち睨まれてジゴワットの国外の監視塔に異動くらつてひつそりと一人暮らしなう。樂でいいね。やることいっぱいだけど。そんなこんなで私は急にある事を思い出したのだ。

カルデア名乗る一行は賢王から一件家をもらつて過ごしてた。去つたあとその家を拝見したら何やら見慣れぬサークルがあつたのね。なんか賢王が召喚どうこう言つてたけどこれのことかな？

と勝手に納得してたのよ。

監視塔でクツソ暇だつたからその召喚サークル？ 的なものをマネっこして遊ぼうと言う結論に至つた訳さ。娯楽少ないからね。なんでも遊びにしようね。

ん？ 今何でもつて（ry

でもサークルとかよぐわがんねえので、適当に円を描いて、間に文字入れる。文字はよーわからんけどこっちの言葉で「あなたと共に世界の行く末を見守りたい」つて書いた。クさいね。野獣かな？

そこで触媒をどうしようかと。年代物のツボとかそんな良きげなものはココには無い。泥と土と炭とまあギリ送られてくる食材くらい。つてか食材だけでも送つてくれる賢王まじ賢王。

そこで思いついた「髪の毛」なんか呪いとか儀式の触媒にもされそういう髪の毛さん。まああつても無くともいいんじやね？ と思つたけど気持ちだよ。こう言うのは。

そんなこんなでできたサークル。特に世界を救うとか願望はないので適当に言の葉を紡ぐ。

「今！ 私はとても暇だ！ 私がこれをやつた事で！ 私がどんな結末になろうと構わない！ 私の暇を満たせる何かを！

私に寄越せええええええええええ!!!!

何も起きなかつた。それもそうである。正確なサークルでもない。正確な言の葉でもない。どこかで縁を結んだわけでもない。泥被つた髪の毛触媒にしてんのだ。むしろ出てこられても微妙だろう。だがまあ少しだが暇を潰せた。次は何をするか：

キイーン

ん?  
—

なんか変な音か……って!?

おお!! なんだあんな元キト!!

「やっぱりガバガバじやないですかー！」

そんなツッコミを入れている間も魔法陣は回り、光り、何かを形作っていく。そうそれはまるで角のような形を…

……角？

壞) おとおしのんなかがねが思ひてまかやう。(三) 二八角

待ちたまえ。  
ちよつと。  
嫌な予感しかしない。

これつてあのファムなファタルのあれとか混沌泥海製造機女神  
が出てきちゃうんじゃないんですか。ビースト顕現とかちよとシャ  
レならんしょ。リアルガチだよ。何やつてくれてんだよ。

そういう言つてる間に光が収束。一つの影がそこには残つていた。

「……？」

「ん?  
…………ふあ?  
」

なんか少女が出てきた

まあ少女と言つても頭に角が2本、しかも見たことのある2回歪曲したあの角。あの際どい衣装もそのまま。しかし腕？ にあつたと思う拘束は無い。正直あれだね。ファムファタール形態のティアマトですね。はい。理解します。ただなんかあの小学生っぽくなつてるのはなんでしょう？ 分からない？ ちよつと首傾げられてもおじさんわかんないなあ。

正直この子がいるだけなら何とも言わんよ。暇潰せそ удだし、いるだけで退屈しなさそうだ。だけどこの子の頭に乗つかつてるのは多分やばい代物なんじや無いかなあと。つてかやばいでしょ。ダメでしよう。

何でこの子頭に聖杯乗せてんのさ。

ちよ、おま、暇とは言つたがとんだ爆弾やぞこの子。なんだろ、爆竹で遊びたいって言つたら核爆弾渡されたこの感じ。正直勘弁してほしいんだけど。

「らー！」

「……お、おう」

ちよつと何だろうな、この子。俺に子供は居なかつたんだが、何というか、父性をくすぐるというか。ぶつちやけ身長が俺の胸あたりまでしか無いし、背が低くなつた影響かなんかオリジナルより舌つたらずな感じだし。なんか和む。可愛い。

「ら！ らー、らー！」

「うん？」

頭の聖杯？

もらつていいのかい？

つて、そのま

ま突つ込むなや…?!」

一般人、聖杯を女神（小）からもらう。どういうこつちやねん。つていうか聖杯私の中に入っちゃったんだが。え、どうしろと。

「ら、ら、ら、ららー」

「えーっと？ 私は君のマスターで？」

「お父さん？」

なんと。私はこんな可愛い娘が出来てしまつたのか。（混乱）といふか知らぬ間に手の甲に痣のような物が……甲だけじゃなかつたわ、指絡めて握る感じに細かく小さい痣がびっしりと出来てる。いや何さこれ。

「んー聖杯どう隠すかの問題が解決したし。とりあえず何か起きたら臨機応変にでいいか」

「らー！ うー！」

「おお、よしよし」

いやあ、うん。可愛いわこの子。今も私の膝の上に乗つてるんるんである。ニッコニコである。私の父性が目覚める。とりあえず誰もこないし、ぐーたらしながらこの子に言葉を教えていこう。その気になれば声帶くらいどうにでもなろう。だつてこんな可愛くても女神だし。

「むにむに」

「らうー」

ほつペをむにむに。ほんわかほんわか。多分聖杯出たつてことはそのうちカルデアの者が来るでしょう。それまではほんわかしよう。もちろん言葉もしつかり話せるようにね。

## 2：経過

「あー、いー、うー、……らー？」

「うーの次はえーだなー。おーまで行ければなでなでしてあげよう  
「うー！　うー！　え…ええー！　お…おお…おおー！  
　らー！」

「おー出来たなあー。おー。偉いぞー」

「らうー♪」

いやあ和む。何だろうね、とりあえず前世的な物で日本語教えちやつてるけど。そんなこと言つたらカルデアの者が言つてる言葉はどうやつて理解してたんだつて話だけども。まあ母音からね。そこ覚えればニポンゴも英語も多分わかるよ。多分きつとメイビー。それにしてなんだろうね。この子：いや、娘にこの子呼びはイカンね。ティアちゃんは、この姿だと父性が爆発しそうな可愛い感じなのね。成長した：というか、オリジナルの方はなんかもうクールビューティ的な感じだつたと思うんだけど。

「まだ力行とかサ行とかあるけど、またあとでいいかあ。でもラ行はすぐ言えそうよね。らは最初から言えてるし」

「らー。うらー。あうー？」

ちょ、あうーつて。クツソ可愛い。首かしげて若干見上げながら言つてるのがさらにGOOD。これを素でやつてるんだからなあ。父親キラーでも付くのかな？　あつ、その前に人類特攻じや無かつたつけか。まあどうでもいいや（思考放棄）

「うりうり。頸ドリルじやー」

「らうー♪」

私の股座に座るティアの頭に頸をグリグリする。それに対しても嬉しい手足をジタバタするティア（小）。

ああ：尊い。ティアとじやれあつてるだけでなんだろう、心が洗われる感じ。そこまでひどい人生じやなかつた氣がするけど、無条件でふんわり、ほんわかするこの感じ。いいわあ。ここまでんびりできっと聖杯だつたり元々のティアと言う存在の核爆弾頭的な意味だつ

たり。どうでもいいよねってなつてくる。

正直な話この事は賢王に知らせた方がいいかな？ とは思つた。  
でもティアが連れてかれたり、酷いことされるかもつて思つたら後回  
しでいいかなつて。

と言うよりは多分賢王知つてると思うんだよね。この世界の事  
だつたら全部見えてるんよつて感じるし。多分だけど分かつたと  
してもこつちにまで手を回せないんじやないかな。ティアと契約？

状態のようだし、もしかしたら賢王の千里眼でも私の事を見通せ  
るか怪しいかもだけど。それを理由にこつち来られても面倒だけど。  
「ティアもねー。お外で遊ばせてあげたいんだけどねー」

「らーうー」

「そーなのよねー。ここ監視塔と言う名の牢屋みたいなものだし  
ねー」

実は最近ティアちゃんと契約してなんとなーく分かつた事。実際  
私がいる場所つてこの監視塔の中の更に奥、牢獄みたいになつている  
所なんだけども。

なんか結界張られてるっぽいんだこれ

何でそんなの分かるのかつてなあ。そんなの娘愛が成せる技つて  
ねえ。いや、ごめんね。娘への愛は結構大真面目で、嘘ついてるわけ  
じやないんだけど、客観的に見て嘘だわ。ごめんね。

んで話を戻すとだね。最近の私はティアちゃんの一挙手一投足を  
眺めてほんわかするのが日々の楽しみであるのだけども。私のそば  
を一定距離離れると、ティアちゃんが嫌そうな顔してぶるぶる震える  
のよ。いやあその姿を見たときに魂が震えそうになつたけど、それ以  
上に心配だったのでいつものように股座に座らせたらね、なんかホツ  
とした顔してたのよ。可愛い。

んでだね。よくよく話を聞く感じだと、ティアちゃん的に良くない

空気がこの中に充満してゐるんだとか。なんか存在否定されてるような、蝕まれるような感触がしていい気分ではないとは姫の談。ウチの姫は可愛いなあ。（脱線）

私の近くにいるとそれが無くなるから非常に安心なんだとか。どう言う事だいそれは。私の体にはアンチジャミングでも搭載されているのかね。もしくはこれも愛が成せる技か。

「あー、うー、るおー！」

「…あー、そういうえばそうだつた。可能性あるねそれ」

そう言えばそうだつた。ティアちゃんココに現れるとき、頭に聖杯乗せていらつしやつた。その時から私にパパになつて欲しいと思つていたら、聖杯さんが叶えちやおうするのでは？

「うー、うー、あうー」

「ウツソだろ、マジかよ。あの聖杯ケイオスタイル漬けしたものないかい」

## 衝 撃 的 真 実

聖杯さんは狂つていらつしやつた。いや、違うか。世界のものとかじやなくて、完全にティアちゃんの物になつていたでござる。

私の 体は 聖杯と ケイオスタイルで 出来ている。

ちよつと。まだ悪影響とかないけどさ。文字に起こしたらヤベー奴だつてマジで。でもティアちゃんが可愛いからなあ。許してあげちゃおう（麻痺）

「うーらー、あえあえうー、うりーおー」

「ふんふん。ティアちゃん的には無意識に聖杯さんにパパになつて欲しいつて思つちやつたのか。それでちよつと狂化入つてる聖杯くんが、私をティアちゃんのパパとして？ というより最強のパパとして？ 変成させちやつたかもど？ いうことかな？」

「うーー！えうーー！」

あえあえうーは可愛い。ノータイムで撫でた私は悪くない。

あつ、ちよつと。話は聞いてたから。物投げないで。叩かないで。

つまりはあれか。世界の父的な存在に変成されちゃつてるのである。そこで、娘を守れるように、娘ができない事はとりあえず何でもできるし、娘が出来ることも大体できる。尚且つ娘をどんな事があつても護れる、帰る場所になれるように、私の周りには全てをブロックするシールド的なモノがあるんじやないかと。ティアちゃん的にはそう思うわけね？

そつかー。髪の毛ケイオスタイル被つた時点で薄々思つてたけど。

私一般人から逸般人にレベルアップしたのね。

娘の愛故にじやなくて、娘が私を愛する故にだつたのがちよつと悲しいけど、まあ卵が先か鶏が先かみたいなもんで。どつちにしろ私はティアちゃんを愛するのは変わらんかつたでしようし。今更気はないよね。ティアちゃん可愛いし。

うーん。そう考えると今の状況が色々分かつてきただぞう。聖杯さんが起動して、私に入るまではとても短い時間だつた。聖杯さん入つてからそれなりに時間が経つてているし、カルデアの者も探知が大変なんじやないかな。分かんないけど。

賢王も聖杯感じたのも一瞬だつたでしよう。それにティアちゃんの存在も私の近くにいれば気配が漏れたりしないでしよう。おそらく私のスキルは、家庭保護『EX』とかでしよう。追加効果でサークル内の子供達の気配遮断とかありそう。ケイオスタイル聖杯くんだもんね。ありえそうね。

つというかケイオスタイル聖杯くんつて呼びづらいよね。

混沌泥聖杯くん： 泥聖杯くんでいいか！ うん、一気に親しみと愛しさが生まれたね。

「ふむ、泥聖杯くんのおかげで私は人でありながら、ティアちゃんを守護れる存在になつたわけね。」

「うー… れうー…」

「怒つたかだなんてそんな事ないぞお？　むしろありがとうと言いたいくらいだよ。私なんかを選んでくれて。可愛いティアちゃんの側にいられるだけで、私は幸せ。これからもよろしくね。ティアちゃん」

「おうー！　あうっ！」

「おー、可愛いなあティアちゃん。ナデナデしてやろう」

うん尊い。べらぼうにめんこい。（語彙崩壊）

ほんとウチの娘は可愛いなあ。ティアちゃん来る前は私も暇すぎて若干狂化入つてると自負していたがね。この子と戯れてるだけでねえ、浄化されてくようですよ。本当に。

ん？　ちょっと待ちたまえよ。よく考えてみたまえ。

私はこの子の…ティアちゃん（小）の父だ。そう、他でもない自身がそう願つてココに在る。だがしかしだ。我が娘の見解だとだね、私の存在はティアちゃんの父で在ると同時に、世界の父とも言えるとか言つてなかつたつけ？

言つたつけなあ（すつとぼけ）

言つたよなあ（確信）

このまま泥聖杯くん（狂）が私の体に馴染んだらどうなるんだろう。全人類が我が子に見えるティアマトさんばりの言い方すれば、全人類が息子、娘に見えるようになるのかな？　なにそれ、すつぐくほんわかしそう。

ティアちゃんが全人類のママで、私が全人類のパパになると。そういうことか。つまりはティアちゃんの家族計画なのかな？　壮大。でも可愛い。

つまりはあれか。お前が！　お父さんに！　なるんだよ！  
つて事か。となるとお母さんがティアちゃん？　あれえ？　事案かな？

際どい服着た小学生くらいの女の子と夫婦やつてる男が今後現れるんですね。（未来形）

んまあ、最悪別にいいかなあ。実際こつちきてから暇だつたし。一番のイベントであつたろうカルデアの者の戦闘も終わつてるし。

そのうちカルデアの者がやつてきて、聖杯回収だーとか来そうだけど。おそらくその頃には聖杯馴染んじやつてアウトやね多分。一応ティアちゃんの物だけど、多分私の体の大部分が、混沌泥と聖杯くんで出来てるからね。多分取つたら私の日常生活怪しくなるんじやねレベル。そんな事したらティアちゃんが激おこティックブンブンドリームして人理漂白まつしぐらなのでは?

やつぱり可愛い核弾頭やティアちゃん。首傾げながら見上げないの。鼻血出ちやうでしょ。もう。

コンコン

「うー?」

「おつ、もう一週間か。食料だ。取りに行こう」

「えう!」

「離れると寂しいもんなー。一緒に行こうなー」

「あうー♪」

うん。言わんでも分かるだろうが。可愛いなあ。

そしてこの監視塔の配給窓から食料が出される。この牢獄?の中は結構な広さがある。それなりに激しい動きをしても支障はない程度には大きい。これも賢王の気配りだろう。囚人、罪人であれ、狭いところに押し込めばストレスが溜まるしね。まあこの監視塔には私1人だからね。実質独り暮らしみたいなものさ。今は可愛い娘がいるけども。

「まあなんか変体してきてるし、そのうち何も食べなくとも生きていけるようになりそうね」

「えいー! うつうー!」

「おつと。そうね。まだ一応人間だし、健康には気を付けないとね。ティアもちゃんとよく寝て育つんだぞー?」

「えいつ! おー!」

：なんだろうね。動きの全てが可愛いよほんと。

娘に心配されてるようじゃダメだね。体調だけは崩さないようにしよう。

さて、食べたら今日も寝よう。明日は言葉を教え切れるといいなあ

⋮。

さつ、ティア。今日も一緒に寝よう。  
夜は寒いからね。くつ付いて寝ようか。  
ティアはあつたかくて抱きしめてるとすぐ寝れるんだ。

### 3：出現

目が覚めたら目の前に超絶可愛い女の子がいた。

あつ、私の娘だ。

私の娘は可愛い。お世辞、顎真目抜きにしても可愛い。100人中99人の男が振り向くだろう。残り1人はホモでしょ。

ところでだ。彼女が最初出現した時に「際どい服装、尚且つ腕の拘束は解かれている」って言つてた覚えがあるんだけど。

うん。なんか大事な部分だけ隠れてるんだけど、特に胸の部分かな。サラシみたいなつていうか。体操競技のリボンみたいな紐が一本巻いてあるだけなんだよね。

まだティアちゃんは（小）だからね。大丈夫なんだけども。今後のことを考えたら大至急服を着せるべきかなつて。抱き枕にしながら思つた。

んでだ。私は今から能力の悪用： 言い方が悪いな。有効活用をしようと思つてだね。

私の意思に関係なく、泥聖杯くんのおかげで私は全ての子供達のお悩みを解決できる、文字通りみんなのお父さんだ。（意味不明）

娘がほぼ半裸に近い状態で出歩く事になるなんて可哀想じやないか。（独断）ここはひとつ使つてない泥聖杯くんの魔力を散らす意味合いも込めて、ティアちゃんの服を「能力」で作つてしまおうという算段である。

とりあえず上着は例のダサTでいいんじゃないかな。あの「人類悪顯現」つて書いてあるやつ。ダサTとは言つたけど、個人的にはセンスの塊だと思うんだよね。あれ考えた人は凄いと思う。（語彙力喪失）

というわけで、寝てるところにいきなりやつてもビツクリして起きるかもだし。起きるまではぎゅーつしておこう。ぎゅー。

「うりゅうー…」

……ほーん！なんですかその反応ー！可愛いー！

待つて。やばい。鼻から愛が溢れるから。ちょっと不意打ち過ぎでいつも我慢してるのがー！

ふう。それなりに一緒に過ごしているはずだが、私の方の可愛さ耐性が全然上がらない件について。むしろ弱体化しているのでは？私お父さんだし、子供には弱いつて所で一つ。（謎）

そんなこんなで悶えていたらティアちゃんが起きたので。脱ぎ脱ぎはしないけどお着替えタイムと行こう。

ちよつと私のお父さんサークル（私命名）に入る所まででいいので、ティアちゃんに自然体で立つてもらう。そこからティアちゃんに今の状態から服を着せる感じで、「あの」Tシャツをイメージ。しつかりと思い浮かべる。

多分ここしつかりやらないと最悪服が全部消えるかも。分からんけど。そんなへマしてはいけない。しつかりとイメージ。サイズもキツすぎずユルすぎず。思い描くは服着たウチの可愛い娘。

そのままティアちゃんに纏わせるよう魔力を放出。イメージに必要なだけの魔力は最低限纏わせる。さあ、あとは手拍子なり指パツチンなりすれば、あら不思議。ウチの可愛い娘が「あの」Tシャツを着ているではありませんか。

「ああ… やっぱりウチのティアちゃんは可愛い…」

「あうあう、ういー」

「お礼なんていいんだよティアちゃん。むしろ今までそんな格好でいさせてごめんねえ」

「らー！えうー」

「それでもありがとうって？お礼が言えるいい子は好きだぞー。わしゃわしゃー」

「えうえうー！」

やはりやばい（子煩惱）

絶対どんな格好でも似合うつてハツキリわかる。

色々着せ替え人形にしたい所だけど、初の魔力行使でなんだか体が  
ダルいし重い。これを息するように行うには相当な時間が必要そ  
だ。これは修行が必要ですかね。泥聖杯くんと混沌泥で出来た私  
の体だが、私自身が使いこなせるようにならなくては元も子もない。可  
愛い娘のために、パパ頑張るぞー。

そういえば、ティアちゃん能力の方はどう程度扱えるのでしょうか。  
気になつてきました。ですが！その前に言語でしよう。あかさたな、  
はまやらわ、ぐらい覚えないとね。そこ覚えれば私と会話してのうち  
に文章は覚えるでしょう。

さあ。お勉強の時間だ。

――――――獣少女勉強中――――――

約30分後

「わた……わ……わタシ……は……ふあ……あム？ フアーム……  
フアたーう……うーでス！」

「おー、凄い凄い。まだつかえてるけど、もうすぐ自己紹介は出来そ  
うだね。えらいぞー。」

「うー！ あム！ えらいぞー！」

「わしゃわしゃー」

「うきやー♪」

可愛い（枕詞）

まだ文字が連なると発音につつかえが見られるけど、1文字ずつ  
だつたら問題なく発声できるし、元々私の言葉を理解できていたか  
ら、喋れるようになるのも時間の問題だろう。

もともと「L a」だけでみんなにデバフマシマシの歌を歌つてたく  
らいだし。言葉くらい楽勝でしよう。このまま順調にいけば綺麗な  
声で喋る娘になるね。わつくわくだよね。踊りも覚えさせたらアイ  
ドルに……。いや、みんなに見せるのは嫌かな。お父さん独占欲湧い  
ちゃう。でもティアちゃんがダンス……。アリだな。お前どう？

「パパー！」

「おーう、なんだー？」

「こノ子つてなんテおなまえナの一？」

ラフムがあらわれた

ちよちよちよちよちよ、待ちなさいつてティアちゃん。えつ、ちよ  
まつ、エンカウントが急すぎてお父さん付いていけない。

「ティアちゃん？」 それどつから来たのさ？」

「パパのいつてル、けいおすたいど？ の中？ かな？ でた  
いつていつたからだしタ！」

出たいつて言つたのか。そして出しちゃつたのか。（計算外）

ウチの娘は純粋な娘でした。（逃避）いやちやうねん。んなこと

言つてるばあいじやねえ！　今お外は平和になつたつてわちやわ  
ちやしてる（してない。みんな記憶ない）はずなのに！　この子を

1人放つだけで大災害やぞ！　確実に抑止力の代行者名乗る方々

がヘー〇ルハウスするぞ！　「ハイ」

『久しぶりの外……だけど……母さん、ちつちやくなつた？』

「むー！　ちつチャくてもママなんダよ！　もう！」

「えつ、君喋れるんかい」

『おつと、初めまして。名前は……何でしたつけ？　まあ自分の存在も何とも説明し難いモノですが、母ティアマト神の子供の1人です。以後よろしくです』

なんと。この個体喋れるらしい。いや待つてどういうこつちやねん。

「あー、こちらも初めましてだな。私の事はまあお父さんとでも呼ぶといい」

『お父さん……。何となく母さんの状態と状況は泥の中から知つたので、まあ分かりました、お父さん』

「うん、よろしくね。あと、なんで君はそんなに流暢に喋れるのかね。私の記憶が正しければ、一部個体が片言で喋つてた覚えがあるんだけど」

末端個体なんて文字化けみたいな感じで言つてる事がワケワカメだつた気がするし。正直マスター補正やらなんやら掛かつてたとしても、ここまでしつかり自分の個を主張できて、しつかり言の葉を纺げる奴がいるとは。

『ああ、私はですね……簡単に言つてしまえば統率個体つてのが早いですかね。私一人で幹部から末端まで私達の大まかな動きの指示をしています』

結構優秀な奴だった。正社員個体か。社畜かな？

「パパ！　コのこのおなまエはー？」

「おー、ティアちゃん。この子はね。ラフムつて言うんだよー。強く耐久力があつて、いっぱいいるんだよー」

『ははっ。母さんがとても気を許している。ここまで素直な母さんも

珍しいね』

「まあその辺はちつちやくなつてゐる影響もあるんじやないかな?」

実際私が知つてた彼女より幼く、体に精神が引つ張られているのか、行動も言動も中々に幼いものとなつてゐる。(可愛い)

『お父さんの雰囲気が母さんを安心させているのも1つの要因かと思われますね。ああそれと、私の他個体は今在庫切れですので、あしからず』

むつ、数で攻めるラフム君が本体のみしか居ないのかね。つてか在庫切れって。量産みたいな感じだし感覚的に違和感がない。しかしそれつて(必要ないけど)戦力的に問題じやないかね。まあ今回ラフム君が出てきた事で、ほかの魔獸達も普通に出せるであろう事が判明した。

言葉に関しての勉強は一段落したし、私含めて今のティアちゃんがどれだけの能力を振るえるのか、本格的に把握する必要がありそうだ。それはそれとしてだ。

「在庫切れ? ティアちゃんの泥の中にいっぱいいるんじやないかね?

その子らはどうしちゃつたんだい」

『少し前に大きい方の母さんと、結構派手にわつしょいしまして。最終的にやられちゃつたんですけど。末端、幹部含め現在母さんがやられた時に全滅しました。私は母さんの中から指示出しオンリーでしたが、他個体との感覚は共有していたので、全滅した時にブワッと色々集まつてショートを起こしてしまい……私だけ残つた感じですね』

ああ、あの魔獸戦線の。あの時彼? 以外は巻き添えで全員オジヤンになつたのか。感覚共有も状況次第じゃ考えものですね。でも彼がいればまた生み出せそうだし、結果良かつたのではと思うけども。ティアちゃんが子供達がやられちゃつたら悲しむんだろうし。うん。死ななきや安いとはこの事か。1人でも残つてれば増殖可能とは流石ですね。ラフム君。

「うちのコはすごいんだぞー!」

『ああ: 母さんがとても無邪氣で可愛いですね: 大きい方の母さ

んはだいぶ中身が怖いと言うか。人類殺すべし慈悲はないって感じがヒシヒシとしていたので。他の兄弟もいまは中でゆつたりしていいでしょう。私は外の状況を見るのも兼ねて出てきましたが

子供達つてなんか私と性格似てないかね。みんなマザコンなんでしょう。神話的にはフツー？　個人的には仲よさそうで大変よろしい。

「他の兄弟は大丈夫そうかね。確か種類的には11人だつたか？」

『ええそうです。中々お詳しい。まあ中の状態は外次第でガラリと変わりますから。兄弟は皆お父さんに感謝していますよ。平和な母さんを感じられて』

いやあ、思つた以上に兄弟達が母親思いでお父さん嬉しい。みんな家族だからね。しつかり母さんを支えて愛でなきやね。……愛でなきやね！（大事な事）

『それでは、他の兄弟と情報共有するので、私は戻ります』

「こどもたチによろしくね！」

「おう、お父さんはいつでもお前たちを歓迎するぞ。ただティアちゃん、次回は事前に誰を出すか俺には言つてくれな？　お父さんビツクリしちゃうから」

他の人の時は許可得なくていいよ。（ニッコリ）そつちの方が面白

そうだし。（ゲス顔）

さてと、ティアちゃんは結構全盛期ばりに色々出来そうだとしてだ。

差し当たつて私の体＋能力がどんなもんかもそろそろ調べておかないとね。できない事はあんまりなさそうだけど、現状把握は大事ね。とりあえずお父さんサークルを広げる方法とかあれば強そだけど、どんなもんだろうか…。

## 4：把握

さて。場所は変わらず監視塔、牢獄内。

最近ですが私は身体变成の影響か、あまり食事が必要ではなくなりました。空腹感が起きませんね。食べても食つてるもののが食つてるものなんで、あまり幸福感？ も得られません。なんなら食わなくて良いかなって。

そのうち料理とかも出来るようにしていきたいなあ。クッキングパパ的な。料理できるお父さんは素敵やん？ 男で料理できる人つて中々いないと思うんだよね。だからオリーブオイルはオリーブオイルしてられるんだね。

ところでスキルといえば。

私自身のスキルに関してだが。ティアちゃんが言う私の变成にしては「お父さんとして結構際限なく色々できる」存在になっている感じ。実際服を魔力で生成はできた。その時もそうだったが、恐らく「お父さんとして」子供に何かやつてあげるという目的であれば、「ほぼ」何でも出来るのだと暫定的に考えている。

実際どこまで出来るのかは分からないし、場所が場所なので派手に動けないのがつらみ。でもティアちゃんが可愛いのでセーフ。（謎）

そこで一つ思いつきました。今現在私はティアちゃんのお父さん兼マスターとなっています。つまりティアちゃんは私の娘です。（異論は認めない）そしてティアちゃんが出来ることの一つ。そう混沌泥ケイオスタイドである。

娘（ティアちゃん）が混沌泥ケイオスタイド出せるんなら、「お父さんとして」私も混沌泥ケイオスタイド出せるやろ！ というゴリ押し。これが出来るんなら殆ど何でも出来るでしょう。可能性は無限大。私の人間性というか、人間らしさは激減するんですけど、娘の為なら人間性なんて捧げてやるさ。（ダクソ並感）

黒い泥出してるだけで混沌泥じやねえじやんとか言われてもあれ

なので、判定人？　のラフム君に出てきました。混沌泥ケイオスタイン

に実際に入つてもらつて、確認してもらいます。

『あはは……お父さんも面白いことを考える。そんな事しようと思うのは今後貴方だけでしようね』

それは褒めているのかな？　褒めていないな？　まあ言いたい事は分かるが、ティアちゃんのパパである以上、越えるべき壁なんだ。超えてやるさ。

さあ、イメージするは無限に広がる自分自身。自身の中身は混沌泥ケイオスタインと聖杯で出来ている。イケるさ。もう既に自分自身混沌泥ケイオスタインでできているようなものだ。出来ない道理はない。

ふんぬう！

スウー……

おお……。おおおおーー！

お父さんサークル内を満たす感じで黒い泥が広がっていく！  
「パパすぐーい！　それわたしの！　わたしがやつてるやつー！」

『これは……予想以上かもしませんね……』

自分もビックリ。そしてティアちゃんは可愛い。（定期）

しかしここで確定したわけではない。もしかしたらなんちゃつて混沌泥ケイオスタインかかもしれない。ラフム君に鑑定してもらわないと。

「というわけでラフム君。ちょっと中を見てきてもらえるかな？」

『ふむ、これなら行けるかな……。じやあちょっと失礼しますね』

と言つてお父さんサークルに入り、泥経由でスルスルと地面の下へ。とりあえず混沌泥ケイオスタインかどうかは別として、彼らが潜れる何かではあるね。

そして数分後、戻ってきたラフム君。

『はい、間違いなくケイオスタイルですね。出した人によつて若干雰囲気は異なりますが、中の感じや気配などからケイオスタイルと断定できます』

「やつたぜ」

成し遂げたぜ。

おそらく混沌泥ケイブランタイトが出来るレベルならほとんどの事はできるでしょ  
う。(多分)

ち ょ つ と 待 つ て

『お父さんがケイオスタイドを出した事でちょっとと思いついたんですけど、ケイオスタイドが出来るって事は魔獣創造も可能なのはと。しかし母さんのように1から作つて育てるのは少々難しいかと。なので、私の分体置いておけば、お父さんのケイオスタイドに合った子供が出来上がるかもと思い、分体を置かせてもらいました』

ふむ？

で、ティアちゃんの11の子供達のような子供達を、私も作れる可能性があるって事かね？

なるかは私次第だけど、元となる者としてラフム君（分体）を置いてきたつてことね。

……やつぱり私の体を闇鍋として楽しんでないかなラフム君。うーん、でも実際どうなるのか分からないし、面白そなのは確か。

「えー！　パパにこどもができちゃつたら、わたしがパパにあまえられないじやない！　パパはわたしどぞーつといつしよなのー!!」  
『あわわわ、母さん。別に母さんとお父さんを引き剥がしたくてやつたわけじやないんですよ。ちよつと、落ち着いて……』

あらま、ティアちゃんご乱心。（可愛い）ちよつと落ち着かせてあげないとダメかなあ。と思いつつティアちゃんを膝の上へ。

「ふえ？」

「大丈夫ティアちゃん。私は子供が増えたぐらいで、ティアちゃんを蔑ろにしたりするわけないよ。こんな事が出来るのもティアちゃんがいるお陰だし、子供ができるも1番はやつぱりティアちゃんだからね。それに、私の子供って事は、ティアちゃんの子供でもあるでしょ？　ならその子もちゃんと愛してあげなきやね。分かつた？」  
「……ぶー。ちゃんとわたしのこともみてよね？」

「もちろん」

ああ……やつぱりウチのティアちゃんは可愛いねえ。嫉妬しちゃうどころもとてもGOOD。

今更なんだけど、ティアちゃんと私の関係つてだいぶ拗れてる氣がするのは私だけかね？　だつてティアちゃんは私の「娘」であり、「妻」である感じになつてきてるよ最近。（恐らく私の中での扱いがだんだんおかしくなつてきてる）

まあどつちであろうとティアちゃんを愛することに変わりはあります！　なので気にしない！　というか問題ない！

ラフム君が私の中にラフム君<sup>α</sup>を置いてしまつたのだが、実际どんな子になるのだろうか。ティアちゃんみたいに細胞レベルで私の眷属的な感じに？　塩基契約<sup>アミノギアス</sup>したら何のスキルが加わるのか

……。パッシブスキルで家族『EX』とか？

詳細が全くわからないけど、お父さんサークルの効果をサークル外でも受けられるとかそんなもんかなあ。スキルの詳細が分からんのもそうだし、お父さんサークルがどこまで色々出来るかも全然把握できてないのよね。効果を検証できないのがね。多分まだカルデアの者とか来ないって事は、サークル内にいればジャミングとか、気配遮断とか、後は家族以外に対する高い耐性を持つシールド的な効果だつたり……は考えられそう。（確証はない）

まあ正直な話、ティアちゃんがちよこつとサークル外に出てた事があつたので、時間の問題でしような。というか今現在カルデアの者達はどこら辺攻略中？　まだあの目玉いっぱいの枝をポコポコしてるのがね？　まあティアちゃん敵側だつたし、最終決戦には呼ばれないでしようね。

「ふーむ、別段体に変わった感じはないし、いつかラフム君<sup>アルファベータ</sup><sub>β</sub>になつて出てくるのかな？」想像がつかないねえ。どうなるのかな」

「んー、でもでも、パパのことも一つてなると、まつくろじやないかも？わたしのこどもは、みんなまつくろくろになつちやうからねー」「それもそうですね。言つてしまえば前例が母さんだけなので、どうなつても不思議じやないです。完全な変体を遂げるか、元のラフムとしての性能を持つたまま別のスキルを持つて出てくるか……』

「どんな風になつて現れたとしても私達の家族だからね。暖かく迎えてあげようね」

「げんきいでてくるんだよー」  
ティアちゃん……。（可愛い）

でもティアちゃんも中々凄いよね。元々のティアマト神は子供達を産み続けてたら、先に生まれてた子供達が、その後生まれてくる子供達による変化を嫌つて、子供達から殺されちゃつた女神様だからね……。本当だつたら召喚出来た私自身も、彼女にとつては殲滅対象で

しかなかつたはずなんだけどね……。

でも今のティアちゃんは何て言うかな……。元々彼女が女神の機能として持つてた「産み、育み、愛でる」がちょっと変わつて、「育み、愛でつつ、甘える」に変わつた感じ? うーん、良く言い表せない。

まあ簡単に言えば、「産む」概念が弱まつて、お父さん(私)に甘える気持ちが強くなつた感じつて言えば分かるだろうか。恐らくは(小)になつた影響で「甘える」気持ちに傾いていつたのかな? と推察している。

正直彼女は神話上の創生の女神だから、他者に甘えるつて事はした事ないだろうし、出来る相手も居なかつただろうから。今の状態を楽しんでほしいと言う気持ちが大きいかな。私がお父さんとして変成してきている影響もあるのか、父性が溢れる。ウチの娘が可愛くなあ。(思考停止)

「まあいつ出てくるか、私自身中の変化が分からないし、気楽に待つよ」

『それもそうですね。全盛期の母さんなんか生成速度が凄かつたですからね……。さつきも言ったように前例がないので、数日か……、数ヶ月か……。早ければ明日にでも出てくるかも?』

「かわいいことだといいねー!」

ティアちゃんの方が可愛い。(多分ラフム君もそう思つてる)

どんな子が出てくるのだろうか……。私の父性が刺激される感じの子なのか、それとも私のような家族が大好きな人が出てくるのか。(ファミパンおじさんは帰つてどうぞ) 出てくるまでは保留かな。

早めにお父さんサークルの詳細を検証したいけど……。ティアちゃんの子供達に頼むか……ティアちゃんに直接お願ひするか……。最終手段……賢王? それは本当の最終だね。何を条件に出されるか分からぬ。まあ面白そだつて普通に手伝つてくれそだけど。

早めに検証の機会を設けたい所だね。

## 5：外出

監視塔からおはこんばんにちは。今日もティアちゃんは可愛いぞ。私の娘だからね。当然だよ。

さて、突然だが今日は外を見に行こうと思う。

お父さんサークルは、なんか分からんジャミング&気配遮断が搭載されてそうな事は分かっているので、外に行くにしても私の周りから離れなければ（多分）大丈夫。

まあ検証してないから（多分）が抜けないんだけども……。

ああ、ティアちゃん何だけど。結構上手に喋れるようになつてきました。まだ舌つたらずな感じのところもあるけども。まあ比べるまでもないけど人間よりもはるかに上達が早いよね。流石はウチのティアちゃん。（子煩惱）

「じゃあティアちゃん！　お外へ行く時の注意事項ーー！」  
「注意じこーー！」

『おー』

ここに集うはいつものメンバー。私、ティアちゃん、ラフム君（統）。ちなみに最近ラフム君はまたティアちゃんの混沌泥の中で静かに増殖中らしい。私的には戦力なんて持つても目を付けられるだけだから、増やさなくて済つたんだけどね。本人が念には念をつて聞かなくてね。

まあ本人がこの関係を壊したくない思いで行動しているだけだし、動機がかわいいから承諾してるけど。どれくらい増やすつもりなのやら。お父さんには分からないです。

「では注意事項！　ーー！　私のそばを離れない事！　具体的には1km以内には居てください！」

『分かりましたーー！』

『1km……ってえ？そんなに離れても大丈夫なのか！？』  
はい、ラフム君。いいツツコミ&いい質問をありがとう。そう、そ

れは最近のことである。

「サークル型にするのめんどくさい。対象者指定で纏わせる感じにでききないのか」

そう。私はふとそう思つた。試しに隣に寝ていたティアちゃんを対象にお父さんサークル（纏）発動！

そしてティアちゃんからソオーッ……と離れる。そしてサークル外に出たティアちゃん。結果は……。

「問題なかつた。1kmまでなら行ける。もし範囲外になつたとしても、サークル効果自体は4時間くらいは多分持つ」

今はこの姿のティアちゃんだが、元々持つてる魔力量は魔術王が持つてる聖杯させた魔力量よりも多く、星間飛行が可能なレベルの魔力炉心だ。マスターになつた十聖杯製の体+彼女の本質とも言える混沌泥も被つてゐる。私自身の魔力量も、彼女ほどではないとはいえそれなりの量がある。

しかも彼女の権能も少々影響していた。彼女のその権能が魔力に付与されたのか、地球上に生命が存在する限り、魔力の方も近くで生き物が僅かでも存在すれば、魔力自体が自立する。まあ単独行動付き魔力とでも思つて貰えれば簡単かな。

『……いやあ、私が言うのもアレだと思いますが、だいぶ魔物に近い感じになつてますね。それも容易に手が出せないタイプの』

「ティアちゃんをひとりぼっちにするわけにはいかないからね。ティアちゃんと一緒に入れる時間が増えるのなら、私は人間をやめることも厭わないさ。ただティアちゃん自身は、今この状況だからこそ私を

通して人類種を克服したいと思つてゐるかもだけ……ね」

「……うー……」

「そんなにしょんぼりしないの、ティアちゃん。私は【人型である】とい  
う一線は超えないつもりさ。どこまで言つても人間【もどき】。  
ティアちゃんが悲しむ事はない。むしろ僕を通してほかの人類種と  
も仲良くできるといいかな。だつてティアちゃんはこんなにも可愛  
いのだから」

「……わたしは……まだパパに甘えてても……いいの？」

「もちろん！　むしろもつと甘えてくれていいんだよ！」

だつてティアちゃんは、私の娘なのだから！

「……パパは何でもおみとおしなんだね」

「そうさ、君の父親なのだからね」

「……じゃあもつと甘える！」

そう言つて私に抱きつくティアちゃん。ああ……淨化される。か  
わゆいのお……。（思考老化）

『……このタイミングで切り出すのもアレですが、まだ外出注意事項  
が1つしか上がつてないのですが……』

おつと、大きく脱線してしまつた。ラフム君、グッジョブ。

「まあティアちゃんは基本的に私と手を繋ぐか、肩車かどちらかで行  
こうか」

「うん！」

『おおう、そう來るのか』

そうしておかげはぐれないだろうし、目が届くところに居られるだ  
ろうからね。そしてラフム君は……

「んで、ラフム君はティアちゃんの混沌泥を少量でいいので持ち歩く  
事」

『ケイオスタيدを……ですか？　ああ、なるほど』

ラフム君は最悪はぐれても混沌泥に入れば合流できるでしょう。各自それらのこと気に気をつければとりあえず問題はない。あとはそうだね。

「項目2！」

基本他の人がいたら声は上げない事。正直お父さんサークル（纏）がどこまで優秀か分からないうけど、気配遮断とか使つてるのに声出しちゃダメね？」

「うつ。私まわりみてはしやいじやうかも……」

「それを防止する上でも、手を繋ぐか肩車は必須ね。ティアちゃん」

「うー……わかつたー……」

「ラフム君は基本自由でいいよ。恐らく君の言語はそちらの人には理解できないだろうし」

『承りました。まあ基本お2人の護衛として動きますよ。気をつける人物はあの賢王くらいですかね？』

おつとそうだつた。かの賢王がそこらを歩き出すとは思えないけど、もしもの時の事は考えておいた方がいいか。

「もしラフム君が賢王を見つけた時は、すぐに混沌泥に避難する事。家族は失いたくないからね。慎重に行動して欲しい」

『お父さん……。分かりました。その方向で動きます』

大まかな方針は以上の2点ぐらいかな。

「後は臨機応变かな！　基本的にはぐれなければどう行動しても構わないよ。まあ大人数で動くわけでもないし、そこまで大変ではないだろうけどね」

後はまあ私がティアちゃんを召喚（謎）をした影響で、その他にも召喚されてたり、私が知り得る限りの正史と違った方がいらっしゃるかも。なのでそこら辺は全くの未知数。予想がつかないので、どうしても臨機応变になつてしまふ。ああでも、金星の女神は確か召喚が聖杯によるモノじやないんだつけ。居残り組なんだよね確か。出会いたくはないなあ。

ちよつと今現在の地理というか、周りの町や市が分からないから、クタ市とかの金星の女神支配圏内に行くとかなると誤魔化せるか分からない。……まああの女神だつたら大丈夫かもだけど。

まあ本来の正史だと賢王も体が無くなっちゃって、神が必要ない時代へと全速前進D A!! つてしてるはずだからね。だから出会うとすれば無理矢理召喚されたあの女神だけの筈……筈!

正直な話ギヤグ時空の風を受けて賢王がいる時点でもあ正史ではないし。他の女神が「やっぱ残るわー」とか、「ん? なんか消えなかつたし、もうちょい楽しむか♪」とかで残ってる可能性は捨てきれない。

でも女神関係出現してたら絶対賢王が動くと思うのよ。大丈夫かな賢王。普段仕事量がないけど、エナドリいる?

あつ。でも冥界の方の女神様は会つてみたい。最終決戦で権能をカルデアの者に掛けた事もあって、元の女神様が消えかかってるかもだけど。家族認定して引き上げてあげるのも悪くなさそう。彼女は冥界の為に尽力した訳だし、他者に責められる謂ではないはず。むしろバビロニア内で1番不憫だつたかも?

状況がアレだつたし、不憫比べしたら他の方々もだいぶ不憫ではあるけど……冥界の女神様に関しては群を抜いてる気がするしね。

あー、でもそう考えると今の時期つてカルデア的には冥界のアレでみんな熱病が出てるのかな? じゃあティアちゃん案件以前に冥界にサンタさんとやつてくるのか。

やつぱりカルデアの者達が来る前に、(行ければ)冥界に行つて女神様助けておくのもアリかも? 肝心の降りる方法が分からんね。やはり行ければつて所かな。

「まあここら辺は何が起きてもおかしくないので。私の周辺から離れないようにね」

「分かつたのー！」

「了解です」

可愛いのー。  
(思考放棄)

監視塔からの出方は簡単。「娘のために」ドアを開けたいと考えれば自然と鍵は開くのだ。私の能力便利ねー。

さて、時間にすると約2年ぶりなのかな？お外に出て参りました。  
ですが……

「夜だね」

「音」二

「暗いですねえ」

お外は夜でしたん。まあこつそり移動する関係上、好都合であるの  
だけども。周り暗いねー。遠くの方に町の灯り?  
がポツポツ見るくらいかな。

地理の詳細が曖昧になつてゐるので、明るい状態で頭の中と照合とか。  
いうか。記憶と実際のズレを合わせておきたかつたけど。まあ後でも出来るかね。最悪は監視塔内から魔力飛ばせばワンチャン？  
でもそれだと他様々な方面から私の方が感知されそう。やめとこう

んー……でもなんか遠くに見える光が妙に青っぽいような……？  
まあウルクの夜だし、若干靈っぽいの……正確にはガルラ靈辺りかな？  
そちら辺に現れても不思議じやないのかな。この時期のウ  
ルクつてたしか冥界と中々に近い状態だつた気がするし。

shaaaaa  
⋮

にしてもなんか多くない？　つてか近くない？

『あつ……お父さん、これ……』

「んー？　ラフム君、どうしたつて……ああーマジかー。それあるのかー」

うーん、これってどう見てもアレだよねー。

檜檻だねえこれ。

監視塔の扉を開けた先は、冥界であつた。

何を行つてるか分からねえと思うが、正直私もよくわがんね。何が影響して繋がつてしまつたのか。でもまだ冥界が横に広いからまだ熱病の異変前ですかね。でも徐々に冥界自体が変化していますね。それで境界部分があやふやになつて繋がつたとか？　納得。いや納得してる場合じやねえ！

つまり今の状態は冥界の女神様がガルラ靈（強）くんから誑かされる？　前つて事じやろ？　つまりまだ冥界の女神様の管理下という事。詰まる所……

「うん、これそのうち冥界の女神様来るね。恐らく確定で」

やばいわー。最初に気づかれたのが彼女つて無いわー。正直一番可能性低いと思つてたのになー。ああでも、冥界に来れたつて事はその他の賢王、カルデア勢に見つかる可能性がグンと減るのか。もうし

しばらくティアちゃんとの絆を深めつつ自分の体を馴染ませたいし、しばらく女神様にお願いしてここに居させて貰えないかな……。

「あー！ エレちやんだー！ エレちやーーん！」

あつ、ティアちゃんが女神様見つけたっぽい。こっちから声かけるのか。（困惑）一応招かれざる客だと思うんだけど。てかエレちゃんて。軽く呼ぶねえ。大きな声で呼びつつ全身を使って手を振るティアちゃんは萌える。

「あら？ 私を呼ぶのは誰なのだわ……てえ？ お母様!? なぜ生きて!? というか小さい!?」

おおう。向こうも気づいた。ああでも、あの反応も可愛いのう。（老化）可愛いに対する耐性が日々下がっていく。が、私は一向に構わん。だが一番はティアなんだ。異論は受け付けるが認めんぞ。

まあこれが個人での初対面になるが、うまく話が進められるかなあ。

正直お父さん自信ないぞー。

## 6. 説明

「エレちゃん、久しぶり！ 私がえってきたよ――！」

「ええ？ ちょっと、どういうことなのだわーー!?」

おおう。大騒ぎだねこりや。でもじやれあつてる2人は可愛いなあ。見てるだけで生きててよかつたって思えるんじゃよ。（老化進行）

そんな訳で（どんな訳だ）やつてきましたは冥界。ちょっとラフム君には潜つて貰つています。私はマスターだしそのまま眺めています。うん、役得役得。

可愛い女の子が2人、百合百合しくじやれ合つてたら誰だつて癒されるに決まつてんだろオラアン！　お前ら可愛すぎなんだよオオン！（謎の咆哮）

「ちょっと母さん！　なんで居るのかは置いておくけど、落ち着いて欲しいのだわ！　これじやあ訳がわからないうから、誰か説明して欲しいのだわーー！」

おつと、お呼びかな。（違う）説明しつつ私の事も切り出さないと、ずつとイチャイチャしてそだねこの子たち。まあ役得だしいんだけど、話が進まないし。ぼちぼち軌道修正しましようか。

「はいはいティアちゃん、戻つておいでー」「はーい！」

「やつと離れた……つてちょっと、貴方は誰なのだわ？」

「ああ、そうか。私は誰とな？　そう聞かれたらこう言わねばなるまい。これからはこう名乗ると決めていたんだ。  
「ティアちゃんのお父さんです」

「……いや、誰？」

おつと、通じなかつた。まあ当たり前か。名前を聞いたのにジョブを返してくるどこぞのRPGゲームみたいなことしてゐるんだし、まあ反応は領けるけども。けれど、けれどね……（檻頭風）

「すまないねえ、名前はどうかに忘れてきちゃつてね。今はティアちゃんのマスター兼お父さんなので、どうかお父さんと呼んでいただけれど。というよりこれからはお父さんという名前でもいいかなと思つたりしております」

「だいぶ濃いわね貴方……むしろ私のお母様のお父さんということは、お祖父さんになるんぢやないかしら？」

おうふ、思つてて無視していた問題を指摘されてしまつた。とつても的を射る答へなのだが、私はお父さんである。そう、お父さんなのだよ。ティアちゃんが私をパパと言うのだから、私はお父さんである。（暴論）

「んー、できればお父さんと呼んでいただきたいかなーと……」「あら、どうかしましたの？　お祖父さん？」

ぐつはあ!!

お父さんに9999のダメージ！

カンスト！

お父さん死にそう！

「エレちゃん！　パパをいじめちやダメ！　私怒るよ！」

「ふふん！　いくら母さんでも、ここは冥界。私のホームよ！　どんな存在であれ、この冥界で私の権能を受け付けない者なんて……あれ？　母さんに権能が効いてない!?　ちょっと、どういうこと

なのだわ!』

あつ、多分お父さんサークルですね。権能すら効かないとかドユコト……

「ふふーん! それは貴女のお母さんだからなのです!!」

ド ヤ ア ア ア ア

あ、なんか分からないうけど後光が射してる。

女神様かな?

女神様だわ。みんなのお母様だわ。

女神を崇めよ。母を崇めよ。(個人差あり)

おおおおおお…… マジエエステイイイイツク!

「訳がわからないのだわ! 前は効いていたじゃない!」

ん? 前は?

……ふーん。つまり彼女はまだ浄化し始まつてない状態なのね。記憶が落つこちる前と。バビロニアの時は効いてたけど、今は聞かない。つまりその時の記憶はまだ残っている、イコールまだガルラ靈君は手出ししてない、もしくは出来ていらない状態なのかな?

これは好都合。この状態なら話も進みやすいし、ここから私がエレちゃんを家族として認めれば、浄化を受け付けなくする事も可能でしょう。まあ本人の性格からして自分から浄化されちゃう子だし、どうにか別のベクトルで説明できないかなあ……。

「むっ! エレちゃん! なんかいつものエレちゃんじやない!  
!』

ティアちゃん?

「……ええそうよ。今は深淵にて会議の真っ最中。今はモラトリームの期間みたいなものかしらね。ほんの一部だけど権限を他の者に与

えてるわ。母さん覚えてるでしょ？　あの戦いで、私は禁忌を犯したの。私は冥界を治める女神として、その代償を償わないといけないのだわ」

ほほおん。まだガルラ靈くん（強）が手をつけていませんねえ！つまりどうにかして（ティアちゃんも総動員して）言いくるめるなりなんなりすれば、こちらに引き込み&amp;家族認定できますねえ！

「代償？　エレちゃんなんかやらかしちやつたの？　お母さんにおしえて『らんなさーい！』

ちよちよちょ。ティアちゃんそれ地雷踏み抜いてるから。原因ティアちゃんだからね。まあでも今のティアちゃんに察する力を期待する方が無理ゲーかなあ。

「やらかしちやつたも何も、元はと言えばお母様が復活しなければ……！」本気を出したお母様に並みの神々が太刀打ちなんかできないわ！　わざわざ招かれざる人間達に加護を与えて、あまつさえ冥界と現世の境界を一時的にでも無くして……。そこまでしてようやくお母様を倒し切れたと！　思つていたのに！」

おおう。すごい剣幕。

でも多分ティアちゃんは何も考えなしに地雷踏んだわけじやなさそうだし、お父さんは静かにステイスティ……。

「……そつかー。エレちゃんごめんね？　私のせいで色々迷惑かけちやつたんだね」

「そうよ!!　元はと言えばお母様が……!!」

「そうだよ。私が悪いの。だから教えて？　なんでエレちゃんがそこまで思い詰めて、そこまで償う必要があるのか。そこだけはお母さん分からぬかなあ」

「あつ……」

うん。そもそもそうやね。

やつてしまつたことは仕方がない事なんだよね。ティアちゃんがわつしょいした事が原因なんだから。だけど、責任を負うべきその事を起こしたティアちゃん自身が居ないからってエレちゃんが償う？

バカ言つちやいけないねえ。

いくら责任感が強くて頭でつかちだとしても、その人が良かれと思つてやつた事を、何も知らない他者が叩いて良いなんて理由はない。多少冥界に危機はあつたとはいえ、そうしなければ冥界はおろか現世、その他宇宙レベルでの損壊が起きうる可能性があつた訳で。

そこら辺の理解が冥界内で浸透していないようだ。やつた事の原因、詳細をあまり話していないエレちゃんも悪いけど、なぜその事をやつたのか委細確認していないガルラ靈君たちもギルティ。

「お母さん今その件については償う必要のある人はいないと思うな？」

よく考えたらその時悪さしてた大きい私はもう倒されちゃつたし。むしろ現世で同じようなことやつたら色々丸く収まつてパーティしてると思うなあ。そこら辺はこっちでの色々な鬱憤を晴らすリフレッシュがてきてなかつたエレちゃんが悪い！」

「そんな話だつたかしら？　え？　今の流れつて私の代わりにお母様が償うとかそういう流れじやなかつたのかしら？」

「お母さん痛いの嫌です！　それに！　そのやつちやいけないルールとか主に決めたのエレちゃん自身でしょ！　冥界の女主人なんて肩書きあるんだから！　メリットデメリットしつかり話してうまく言いくるめてやつちやいなよ！　私の娘ならそれくらいやりなさーい！」

おおう、ぶつちやけたな。

正直彼女の性格上こういう事を面と向かつて話せる相手も限られてくるだろう。正直な話こんな事はティアちゃんでなければ出来ない事じやないかと後々ながら思う。

「なのでー！　お母さんは冥界でのクリスマスを決行します！」

「ちよつと!? 勝手に決めないでほしいのだわー!」

という訳で。（どういう訳だ）

ティアちゃんの全面的な魔力提供、および指示出しにより、ガルラ  
靈君総出で冥界の飾り付けが行われました。

まあでも手伝つたのは比較的幼い子供の靈たち。ツリーの飾り付  
けとか嬉々とした？ 動きでやつてた。

うん。側から見ると結構シユール。

そして今更だけど冥界全土の飾り付けを、ティアちゃんが己が内に  
ある魔力のみで行つたという事実。魔力と才能をばら撒くスタイル。  
お父さん嫌いじゃないよ。（むしろ好きだよ）

そして色々裏で動いてやつてたガルラ靈君は、冥界の奥底で引き氣  
味にこちらの事を見ていたので分かりやすかつた。エレちゃん悩ま  
せていたのが気に触つたのか、ティアちゃんが容赦しませんでした。

権能を戻してガルラ靈君たちに事の詳細資料（私作成）を渡して映  
像中継（私撮影、私放映）でバビロニアでの事を事細かに説明。ガル  
ラ靈君達もティアちゃんの気迫に消滅の危機を感じたのか、震えなが  
ら謝つてた。別に殺しはしないよ。そういう問題じやないし。

色々事が終わつて冥界。クリスマスもつつがなく終わり、後片付け  
(私魔力吸収) して今後もエレちゃんが冥界の女主人としてやつてい

くことに。

「ほらね！ みんな騒げばなんとなく収まるの！ エレちゃんの性格的に絶対やらないだろうけどね！」

「うぐ…… 全く否定できないのだわ……」

「まあちょっとティアちゃん的にアウトだつたのか、だいぶティアちゃんもはしゃいでた感じあるけどね」

そこは（可愛いので）大目に見ようじゃないか。

「けど、ティアちゃんがいなかつたら、多分だけど自分のやらかした記憶と一緒に、それを記憶しているカルデアの人たちも消すみたいな事やらかすつもりだったんじゃない？ エレちゃん」

「……そうですね。おそらく少し前の私だつたらそういう結論に辿り着いたかもしません。でも今はもう色々どうでもいいかなって思うのだわ。今更だけど、やつちやつた事についてあれこれ考える時間があるなら、今冥界にいる子たちのケアとか、より良くするのにはどうしたら良いとか。そういう事を考えた方が、何倍も有意義で、意味のある事だと思うわ」

「そーだよ！ 色々考えさせる原因になつちやつた私が言うのもアレだけどね、エレちゃんはどう一んと構えてれば良いの！」

そう言つて胸を張るティアちゃん。立派にお母さんしてるなあ。あとでなでなでしてあげよう。いっぱい褒めてあげないとね。

「お母様。……お父様も。恥ずかしい姿を見せてしました。ですが、こうでもしなければもつと恥になりそうな事をやつていたかもしれないのだわ。だから、ありがとうございました」

「いいのいいの！ エレちゃんは私の家族なんだから気にしないの！」

「お父さんと呼んでくれた……我が生涯に一片の悔いなし……!!」

あつ、そうだ。（唐突）

「じゃあエレちゃんも私の家族って事で。決定でーす。パンパカパン。おめでとうございまーす！ エレちゃんの権能をも防いでいたお父さんサークルをエレちゃんにもプレゼントー！ パチパチー」

「わーい！ ぱちぱちー！」

「えつ、ちょつ、どういう事？！ 権能をも防ぐって何？！ アレはお母様の力じやなかつたの？！」

おーう、わたわたしてる。良い反応ダア。撫でたくなつちやう。撫でたろう。ナデナデ。

「ちよつと！ 気安く触らないで！ ……もうちよつと優しくするならいいけど……」

落ちたな（確信）

「エレちゃん、顔まつかつかー」

私の肩に乗つてるティアちゃんがエレちゃんのほっぺをつんづんしてゐる。

なでなで。つんつん。

まあこんなモブ顔（自己評価）の奴に権能防ぐ力なんてありやせんわな。どつちかつていうとティアちゃんから貰つた泥聖杯くんの力で、権能に浸食して防いだつて感じが強い。そこら辺噛み碎いてエレちゃんに説明。かくかくしかじか。まるまるうまうま。

「お父様も大概ですわね……でもそれつてお父様の身体的に大丈夫ですか？」

おつ、心配してくれるので。やつぱり根は優しいのねこの娘は。

「モーマンタイ。娘がお父さんのこと気にしなくてよいーの！ 子供たちのことを一番に考えるのは当たり前なんだから、いっぱい甘えて、いっぱい困らせなさい！ むしろその方がよき。いいぞもつとやれ」

「あー！ パパがエレちゃんばかりかまつてゐー！ 私もかまえー

！」

「……（無言のなでなで）」

「むふー！（満面の笑み）」

「ほんとに仲良いわね母さんたち……」

エレチャ янが頭抱えつつ、ティアちゃんは満面の笑み。どうだ可愛いだろう？ 可愛いは正義なんじやよみなの衆。

偶然とはいえエレちゃんサルベージ作戦がうまい具合にできてしまつた。一番常識的な女神様が最初でホツとしてる半面、また何かしらの影響が違うところで出てこないかお父さん心配です。

ところで。

「ちなみにエレちゃん」

「もうあなたもエレちゃん呼びは確定なのね……」

「そりやもちろん。というよりさ、私とティアちゃんは別に冥界に来ようと思つて来たわけじやなく、迷い込んだ感じなんだけどさ。そこらへんの境界とか結界とかつて大事なん？」

結構スルツとこつちに着ちやつたけど、そこらへんの修復は済んじやつてるのかね？

ビースト特有の「単独顕現」スキルで移動関係は場所さえ分かれればどこにでもつて感じるらしいんだけど、境界面あやふやならわざとランダムに飛ばされたほうが、自分の知らない場所とか行けそうだから、今どんな常態か一応確認してみる。

「そうね、まだ境界に関してはデリケートなものだし。多めに見積もつても40%程度じやないかしら。今そこらへんの足場のないところに飛び込んだりしたらその後の保障はできないわ」

bingo。つまりところランダムワープ可能。

「よし、ティアちゃん！ あとはエレちゃんに任せても問題なさそうだし、こつから飛び降りて違うところに行こう！ もしエレちゃんに何かあつたとしてもエレちゃんにあげたお父さんサークルとティアちゃんの単独顕現スキルがあれば問題なし！」

ここをキャンプ地とする！

「よーし、れつづー！ エレちゃん！ 私パパと旅行に行つてくるね！」

「また随分と急な話なのだわ……。ええ行つてらつしゃい。お土産楽しみにしてるわ」

「まつかせてー！ パパ！ 行くよー」

そのまま足場のないところへ飛び出す。行き先は完全にランダム。新婚旅行へと参りますか！

## 7. 行先

冥界での一件を経て、ランダムワープで行先の分からぬ新婚旅行へ。ガチランダムで考えると岩の中、水の中、マグマの中 etc. etc.……。ちょっと博打が過ぎる感じがするけど、本家ビーストと、そのビーストの機能にがつづりあやかつての聖杯取り込んで行きましょう。

そして現在。

猛スピードで落下中です。

「なあティアちゃん。かれこれ落ち始めてどれくらいよ？ これ」「んー？ わたしにもわかんなーい」

「ですよねー」

なんてほのぼのしながら落下中。

そして徐々に行き先が明るくなっている。そろそろ目的地に着くらしい。

「ティアちゃん掴まつて。もうすぐ着くよー！」「りょーかいー！」

行き先は未定！ これより新婚旅行を開始する！！

「よつと」

やつてきました旅行先1つ目。とりあえず水の中とかマグマの中は避けられたらしい。ダメージ云々は置いといてそんな状態になりたくないしね。幸先は悪くなさそうです。

「ティアちゃんは大丈夫?」

「もーまんたい」

ビシツとはにかみながら敬礼してくるティアちゃん。可愛い（脳死）

さて周囲の確認。なにやら建物内の長い通路。通路の先は遠すぎて先が見えない。通路の両脇は華やかな絵が施された壁……いや、これって襖じゃないですかね？ WASITSUによくあるFUSU MAじやないですかね？

なんせ自分バビロニアに転生した一般人。一応転生前は日本人だつたんでつせ。日本特有のものをわざわざ英語（大文字）表記にする書き方結構好き。

それはそれとして。

「……何か近づいてくるな……。ティアちゃん。肩車しておくからこっちおいで」

キヨロキヨロと周りを見渡していたティアちゃんをいつでも守護れるように（する必要があるかは置いておいて）肩車しておく。おいで。

「はーい」

ぽてぽてとこちらに歩み寄つてくるティアちゃん。うーん、ベ<sup>良い</sup>ネ。

そんなティアちゃんからこんな一言が。

「んー、なんかねー。今近づいてる子をねー。うんと甘やかしてあげたい感じする！ よしよししてあげたい！」

なんてことをウチの小さな女神様が仰つております。なに、なんかセンサーでも付いてんの？ つて感じ。つていうか私がティアちゃ

んをよしよししてあげたい。（よしよしながら）

「ん、おつけ。何が来るかも分からんけどティアちゃんが言うには間違いないでしょう」

家族が増える（暫定）よ！ やつたねティアちゃん！（おいやめろ）

何がやつてくるんでしょうか。ちょっとウキウキしながら待つていると。

「ハア……ハア……！」

なんかちつちやい子が息を切らせながら走ってきてる。なんだろう、何かに追われてるのかな？ どちらにせよそのまま行くと私の方に追突するルートなんだけども。

「パパ、けはいしゃだん？ してるんじゃない？」

「あっ、そつかあ」

お父さんサークル発動してましたわ。ランク分からん気配遮断が仕事してるとか、それとも走っている子が前見えていないのか分からんけど、こちらに気付いていないのは確定っぽい。

「ティアちゃん。あの子がさつき言つてたなでなでの子？」

「そう！ あの子！ なんかね、なんかね、うーん良く分かんないけど、さびしいよーって気持ちがビンビンくるの！」

かわいいよー（脳死）。

追われている（暫定）彼女の後ろに追手の姿は見えない。ならばこのまま迎え入れて自分のサークル内に入れて気配遮断を付与してしまえばいいのでは？ という安直な考えによつて、お父さんはあの子をそのまま抱きしめてあげようと思います。

頭の位置がちょうどお腹辺りに来るから、パニックになつてもちょっとだけ顔をお腹に埋めて声を殺せば行けるはず。

「じゃあティアちゃん、ちょっとだけ静かにね」

「はーい！」

よしよし、ではカモン！

謎の少女よ！

ボフツという音と共に「あうつ」という可愛らしい悲鳴が。そのまま手を背中に回し抱え込む形で彼女の耳に囁く。

「大丈夫、少し静かにしててね」

「……！ ……！」

少し錯乱しているようだが声は聞こえるようで、もがもがとしているが手は腰に回して離さない。手を離さないのはなんかおかしい気がするけど、恐らくティアちゃんの仕業でしょう。徐々に抵抗も少なくなってきてる。こっちの問題は無さそうだ。後の問題としては……

「……全く……どうしてこうイレギュラーが発生するんでしょうか……本当にイライラする」

彼女の後ろの通路からゆつくりと姿を現したのは、今抱きかかえている彼女をそのまま大人にしたかのような女性だった。表情を見るに少し苛立つているようにも見える。

「いくら私から逃げようとしても所詮は私の分身。何人もいるコピーの一人。元となつた私が、貴方の逃げ場所を分からぬ訳がありません。こちらに逃げたのでしょうか？」観念して姿を現しなさい」

彼女は分身だのコピーだの言いながら真っ直ぐとこちらに歩いてくる。心なしか腰にいる小さな彼女は少し震えているようにも感じる。

大きい方の彼女が目を閉じる。気配で探っているのだろうか？  
「……おかしいです……この辺りで完全に気配が途切れている……どういうこと……？」

……こちらの気配遮断が破られる心配は無さそうだが、どうにもここを離れてくれそうにない。少し離れたところで小さい彼女に事情を聞いてみたいのだが……。

初めてでできるか分からないが、少し動いてみるか……。

気配遮断をしながら抱えた小さい彼女はそのまま、襖の近くまで移動する。さつき襖の奥は確認済み。この通路と同じような形で延々

と通路が続いている。襖を挟んで通路が大量に並んでいた。であれば、うまく力をコントロールできれば……

ガシャアン！

「……ふふふ。自分から音を出してくれるなんて哀れですねえ。すぐに捕まえてあげますから、震えてまつてなさい」

そう言いながら大きい方の彼女は音がした方の襖を（おそらく魔法でやつてるんだろうけど）自動ドアのように手を使わずに開けながらズンズンと進んでいく。気配探りながらで動いてたみたいだから動いてくれるか分からんかつたけど、意外にも素直に誘導されてくれた。

分身やら自分と同じやら怪しい単語がいくつか聞こえたけど、そろそろこの子から詳しい話を聞出さないといけないなあ。

「パパー、下見てみてー？」  
ん？ 下？

「下がどうし……」

「スン……スン……」

……ん？ なんかこの子匂い嗅いでない？ 嘘、お父さん臭ってる

？ マジで？

「パパのにおいはねー、なんかこう、ほわほわーって感じでね。とつても安心できるにおいがするんだよー！ その子もー。においかいで、安心してるんじゃないかなー？」

な、なんだつてー！ お父さんはマイナスイオン発生器だつた……

？

匂いなんて相当相性が良いとかでもないと、いい匂いだなんて感じ

ないでしょに。あれか？ これも全人類のお父さんになつた影響  
なのかな？ きっと私やティアちゃんが自分の子供と認めた人は  
は安心する匂いになるとか。

今度エレちゃんにもやつてみよう。なでなでとぎゅーを。それで  
分かるべ。（やりたいだけ）

このままでは話が進まないので、良い気分になつて（であろう）  
彼女を一旦離して……。

「ううー、やです。もつとおい嗅ぐんですうー」

あらやだ、なにこの娘可愛い。（何かが崩れた音）

ていうか既に若干中毒症状みたいなの出でません？ ちよつと症  
状が出るの早すぎないですかね。んーでも安心できるならいいか！

（やけくそ）

「パパー？ なんかよくわかんないけど、この子私たちに似てるー  
……かもー？」

「似てる……？」

ちよつと首をかしげながら言うティアちゃん。若干角が体に当  
たつてるけど気にしない。にしても似てる……とな？ ティアちゃん  
に似てるとなるとなんだ……。口リつ子っぽいのはまあ見た目だ  
し、その場合はよくわからんけど、なんて言葉は出でこないはず  
……。

「んー、もしかしてビースト的な？」

もぞもぞ

んーこの子の反応でわかるかと思つたけど、お父さんの匂い中毒になつて顔を擦り付けて反応しないね。

「もしもしー？匂い嗅いでいいからさ？ ちよつとお父さんにお  
話し聞かせてもらつていいかなあ？」

なるべく刺激しないように優しく声をかけてみる。中身がどうであれ見た目は幼い少女だ。（ティアちゃんとサイズ感変わらない）コミュニケーションは慎重にいつた方がええやろ。

「……お父さん？」

上目遣い。首傾げ。童顔。匂い中毒？ により若干赤みがかつた頬。うん。この子を娘にしよう。絶対にだ。

狙つてやつてる？ えつ？ 素ですか？ 弱点特攻なんですが？

お父さんのこと狂わせに来てるでしょこんなん……。こんなん

……!!

「ティアちゃん。この子を娘にします」

無言でサムズアップするティアちゃん。さすが私の嫁。話がわかつてるぜ。顔見えてないけど鼻血出でるでしょティアちゃん。ぷるぶる震えてるし、母性くすぐられてるの丸わかりでっせ。

「娘とか、何言つちやつてるんですか？ 私が今どんな状況なのか分かつて言つてます？」

お腹に顔をうずめながらモゴモゴとした感じで言う謎の少女。言つちやアレだけどそれブーメランやで。セリフと行動が乖離しているんですが。まあ可愛いから問題はないけどさあ。

「君がどういう状況であろうと私が娘にすると決めてティアちゃんがゴーサイン出したからには、ガイアに拒まれようとも因果を捻じ曲げてでも娘にします。決定事項です」

「あきらめなさいー！」

ティアちゃんいいぞ。もつと言つてやれー。

「そもそもなんで追いかけられてたのさ。そこらへん教えてもらつてもオーケー？」

「おーけー？」

「へい、そこんとこどうなのよ幼女。

「……頭では言いたくないのですが……体がもう言うことを見きません……。仕方ないです。非常に不本意ではありますけど、事の一部始

終教えてあげます。いっぱい私に感謝してください。咽び泣いて喜んでください」

あらツンツンしちゃつて可愛い。抱きついてクンクンしながらいつても形なしだぜ。やだもう最高。可愛い。

### 幼女説明中

色々と事情を聞いて数分。なんとこの幼女カーマという愛の神様（の分身体の一人）らしい。元の原典は男性神とか依代的な問題で女性になつてるとかはこの際置いといて、この子は本来のマーラ／カーマとしての本体の分身として生まれるはずだつた。しかし何が間違つたのかこの子は本体に有るはずの「シヴァにとばつちりで焼き殺されてグレた暗黒面」が無く、純粹なカーマちゃんとして生まれてきちゃつたとの事。（捻くれてどうにかしてマウント取ろうとするムーブするのは素で言つてるっぽい）

なんだただの良い子か。お父さん納得。

話してゐる間膝の上から離れてくれません。ちょっと体制がよろしくない。これつて対面座位ですよね。これは狙つてやつてるな？  
マセガキちゃんめ。しかし私は君のお父さんだからね。父性が湧くことはあつても欲情はしないぞお。

「ん？ でもこつちのカーマちゃんが私の娘になつたつて事はカーマちゃんの本体も姉妹つて事で娘では？」

「何言つてるんですか。あんな拗らせまくつて面倒臭くなつたイタイ女と一緒にしないで下さい。お母さんもそういえばそうだね！ みたいに指刺してこないで。ああもうそんな悲しそうな顔しないでよ！ こつちがやりづらい！」

おおう激しいなカーマちゃん。どうどう。

ティアちゃんも子供達が増えるのはいつでもバツチコイな為、肩の上でサムズアップしながらニッコニコで鼻血垂らしてゐる。（実際に見

たわけじゃないけど多分確定)

「とりあえずカーマちゃんを家族として迎えて可愛がるのは確定事項なので」

「……まあ今はあんなヤツと一緒にいるよりもつちにいる方が何倍もマシです。というよりなんかお父さんから離れたくないんですけど。なんでこんな全身の力が抜けそうになる匂いしてるんですか。責任取つてください」

「もちろん。カーマちゃんから嫌われて愛想尽かされるまでは、いつまでも私はカーマちゃんのそばに居るよ。そんな時がこない事を願うけどね。分身として現界する以前も含めて、今までの重荷を癒せる存在になりたいかな」

そう言いながらゆつくりとカーマちゃんの頭を撫でる。

さつき追われていた時もそうだし、彼女の境遇を聞く限り座に刻まれる前も口クな人生じやなかつただろう。彼女の苦労を自身が推し量る事はできないかも知れない。けれど、彼女が自分と居ると安心すると言つてくれるのであれば。彼女にとつての止まり木になれるのであるのならば。私は彼女のことを愛そう。

「愛の神を愛する……ですか。愛がどういうものか。分かつて言つてます？」

「明確にコレっていう答えは出したくないかな。でも私が与えられる愛を君が嫌つて言うまで押し付けてあげるから。私が言わなくてもいつか分かるって信じてる」

私がそう言うとカーマちゃんは少し頬を赤くしながら私の胸に顔をうずめてくる。彼女の過去はそのまま彼女の存在をそうたらしめるもの。そう簡単に心を開いてくれるなんて思つちやいない。だけど彼女が何の打算もなしに甘えられる相手として、私が存在できたらいいなつて。そう願わずにいられなかつた。

## 8. 今後

「お父さんと!!」

「お母さんの!!」

「家族ルールのコーナー!!」

「……（クンクン）」

さあ！ 未だ匂いを嗅ぎ続けるカーマちゃんだけども！ そんなことは置いといて家族になるにあたつてのルール説明の時間だオラアン!!

というわけで、カーマちゃんを家族に（強制）したのでいつも通り（今回初）最初の家族ルール説明を行いたいと思います！ Yes！ 強行です！

「その1！ 基本的にお父さんとお母さんであるティアちゃんと一緒に行動してもらいます！ ジやないとお母さんが泣きます！」

「うおー！ 泣くぞー！ 色々暴れるぞー！」

「……それってもはや強制じやないですか？ 迂闊に離れられないじやないですか」

「もしそばを離れる場合は何か一言お父さんに言つてくれればいいよ。言いたく無ければ理由も言わなくていい。ただ一言だけ離れる旨を伝えて欲しい。最悪勝手に居なくなつたらお母さんが癇癪を起こして空の星が一つくらい消えるかも知れないので、まあそれくらいだよ」

「えへへー」

「言つてる事とお母さんの顔のギャップが激しすぎでしょ……」

まあ勝手にどつかいつてもお父さんはお父さんサークルの効果で何処にいるか把握できるんですけどね。

ティアちゃんが星一つ消すかもつてのはちょっと盛つたかもしれない。だけどエレちゃんの件でティアちゃんが「エレちゃん！ まだだれかにイジメられたらすぐお母さんに言つてね！ そんなやつお母

さんが消し炭にするから!」って言つておりましたので……。

星一つ消えるかもつてのは、文字通り地球一つ消えるかもつて所だけども、そこは詳しく言う必要はないでしよう。

「その2! これからカーマちゃんは私たちの娘です! 必ず「お父さん」「お母さん」呼びをする事! 言われないと拗ねます。お父さんもお母さんも」

「拗ねるよー。超拗ねるよー」

肩の上でお父さんの髪をわしやわしやしながらニッコニコで言うティアちゃん。やはりウチの嫁が1番かわいい。娘も可愛い。異論は認めるけど否定はゆるさん。

「……ちなみに拗ねるとどうなるんですか」

「最終的に泣きます。お父さんは泣かないけど、泣いてるティアちゃんをあやしてあげないといけないので、カーマちゃんに構つてあげられなくなります。結果カーマちゃんはお父さんの匂いを嗅げなくなります」

「お母さん、絶対泣かいでください。私の癒しを取り上げるなんて許しませんよ」

「にひひー」

お母さんつて言われて満面の笑み（予想）のティアちゃん。想像に難しく無い。ティアちゃん。嬉しいのは分かるけど、抑えないとまた鼻血出るよー。そしてカーマちゃんはだいぶチョロくなりました。やっぱり中毒じやないか!

「ルールその3! 家族となつて3日～1週間ほどですが、特訓をしてもらいます!」

「特訓?」

お腹から顔を離してこちらを見上げつつ首を傾げるカーマちゃん。おう、その仕草やめて。お父さん特攻だからお父さん尊死しちゃう。嘘、何回やつてもいいよ。もつとやつてもつと。

「カーマちゃんは私たちの家族として、分かりやすくいうとマスターとサーヴィアント的な契約状態にあります。カーマちゃん。君が今契約しているのは誰でしょーか?」

「誰つて、お父さんとお母さんでしよう？」

おうふ、不意打ち來ました。良い。良いよこれ。なんか呼ばれるだけで多幸感。ティアちゃんはエレちゃんと呼ぶ慣れてるはずなのに、私の髪に顔をうずめてビクンビクン悶えている。分かる……分かるぞティアちゃん！」

「その回答はとつても嬉しいんだけど、問題はそこじゃないんだ。よく思い出して。ティアちゃんは何者？」

「……ビースト？」

「じゃあお父さんは？」

「ビーストの眷属？ もしくは番つがい？ 尚且つ聖杯を体に取り込んでいて……あつ。魔力量」

基本マスターとサーヴァントの主従において、サーヴァントがどれだけ能力を引き出せるかは、マスターの生まれ持った魔術回路、魔力量。それらによつて出せる出力、宝具の回数などが決まってくるもの。しかしカーマちゃんが契約しているのはほぼ無尽蔵とも言える魔力炉心を持つビーストのティアちゃんと、聖杯という最高峰の魔力炉心を取り込んでいる半人半ビーストのお父さんである。

ぶつちやけた話前にいたあの成長した方のカーマちゃんの所にいた時より色々動きやすくなっている。さらにプラスでいろんなバフかかるつてるような状態なのだ。

「多分今までできた動きとこれからできる動きに差ができるから。それに慣れさせるための訓練つて感じかな。しつかり定着させれば君の本体を倒すのくらい片手ができるようになる。多分、きっと、メイビー」

「めいびー！」

「いや、後半自信なさ過ぎじゃないですか……」

んまあそこはぶつちやけカーマちゃん本人次第。カーマちゃんが本体を越えようとする思いが強ければ、それを叶えるためにお父さんとお母さんは精一杯フオローもするし、手助けする。あくまで私たちは支えるだけ。強くなるか。或いはこのままで私たちの愛を甘受するか。カーマちゃんの思いを尊重し、私たちからの押し付けはするつ

もりはない。

しかしお父さんとお母さんと契約した以上、その力はとてつもない。力をコントロールするのに必要最低限必要なのが3日間。もしそれ以上を望むのであれば1週間（かそれ以上）になるのだ。

まあ強くなりたいかー！ つて聞くのは力をコントロールできるようになつてから聞くとして。

「とりあえず特訓は必須事項だよ。多分何もせずにそのまま何かしら戦闘とかに巻き込まれたら絶対扱いきれないから。お父さんの名譽にかけて娘を死なせるなんてことはしないけど、それでも最悪の場合は死ぬかもしれないからね。お父さんの子である以上死んでも死なせないけど」

「サラッとしたんじゃないこと言つてますよね……」

The・自分勝手。お父さんとお母さんが悲しくなるので、本人意思に関係なく復活させるぞい。仮でも家族になつちゃえば、座から呼んだ英雄よろしく魔力次第で復活させるなんて事は簡単なのです。

こう言うことができちゃう辺りビーストに染まつてる感ある。

「特訓とは言いましたが、ぶつちやけた話特訓場所も特訓相手も決まつてしません！」

「かなりぶつちやけましたね」

「んー、ラフム君とかにお願いするー？」

『呼びました？』

ティアちゃんが名前を出した瞬間に姿を現したラフム君。しかもカーマちゃんの視線に入る形でぬるつと。

「キヤアアアアア!! なに!? 何ソイツ!?

おおう、なかなかヒステリックな反応。ビックリして怖かつたのは分かるけど、お父さんの胸に顔埋めて目を逸らすんじゃないの。中毒酷くなるよ？ もう手遅れだらうけども。

ラフム君が私の背後から現れたのは特訓の成果である。この場所に落ちてくる途中でティアちゃんの混沌泥ケイオスタディと私の混沌泥ケイオスタディをリンクさせたので、そこから経由してお父さんサークル内で単独顕現できるようになりました。これで混沌泥ケイオスタディを使わなくても私の能力範囲内であれ

ば自由に入り出しきるようになつたのだ。

「よしよーし。怖くないよー」

「……泣いてなんかないです……」

泣き出す3秒前ぐらいの表情で強がるカーマちゃんとそれをなでなでするティアちゃん。いつの間に降りたんだいティアちゃん。ちやつかりカーマちゃんと一緒にお父さんの膝の上に乗つてるし。目の前でほんわかされるとお父さん和んじやう。

「ラフム君なんかゴメンね。登場と同時に悲鳴を上げられて。めつちや特訓した成果出てるから、あんまり落ち込まないでね」

『まあ見た目からしてそこらへんは諦めついてますよ』

まあ頭に向きがおかしい大きな口が付いてるだけでも結構SAN値削られそうな感じあるよね。足2本！ 謎の節足が4本！ うーん不気味！ でもなんか触り心地良さそうなツルツル感あるのがセクシー？

「うーん個人的にそのフォルム嫌いじゃないけど」

『それ、結構少数意見なんですよ?』

「ちなみにあたしもすきー！」

元気に返事するティアちゃん。あなたが生み出した子でしょうに。というより自分以外の生きる物全てを愛してそうなティアちゃんの好きはアテにならんぞ。お父さんはそういうティアちゃんも好きです。

『まあ特訓相手なら是非。それなりに個体数も増えたんで、サンドバッグには持つてこいかと。あとは場所ですね』

サークルで気配遮断出来るとはいえ、あまり大きい音を出すのはよろしくない。となるとどうしたものか……。

「一回冥界にもどるー？」

「まあそれが1番選択肢としては妥当かな」

「えっ、サラツと言つてますけど、冥界？」

よしつ。そうと決まれば善は急げ。カーマちゃんを連れて冥界へ帰るぞー。

しかし、このまま帰ると元のカーマちゃんに変な違和感を与えるこ

とになりかねん。家族認定してこつちのバスとは繋がつてるとは言え、まだ向こうとも繋がつてゐるはず。そのバスを外しつつ、カーマちゃん1人分の魔力をバスから戻してあげながら消えるしかない。

うつわ、めんどくさい。

しかし、愛する娘のためだ。お父さん張り切つちやう。

「ほいじやカーマちゃん。そのままお父さんに抱きついてて。ちよつと向こうのカーマちゃんとのバスを切るから」

「……そんなこと簡単にできるんです？」

「まあ魔力をお父さんの方に入れ替えるだけだから。バスの繋がつたカーマちゃんの魔力のガワを取り出して、足りない分の魔力をお父さんの魔力で補う感じ。ちよつと体がふわっとするだろうから、しつかり捕まつてね」

半信半疑といった感じのカーマちゃんがぎゅうつとお父さんにしがみつく。

おーけーおーけー。イメージは固まつた。そのままカーマちゃんの魔力だけに皮を被せるイメージで後ろに2歩ほど下がる。向こうとのバスが繋がつたカーマちゃんの形を持つ魔力塊の完成。今こちらが抱えているカーマちゃんの魔力が少なくなるので、お父さんの魔力で補強する。あとはカーマちゃんの中に残つた魔力を一つ残らず外に出して……。

「ほい、終わり。どう？　どこか不具合とか無いかな？」

「……（クンクン）」

「おーい、戻つてこーい」

「あるえ？　これ悪化してない？」

ガツチリホールドした状態で、顔を擦り付けながら、顔は若干赤くなつてゐる。重症じやね？　つてかティアちゃんまだなでなでしてたん？　いいなそれ。私もなでたい。

「ちよいちよいカーマちゃん。お父さんの匂いは好きなだけ嗅いでいいから。体に違和感とかないか教えてちよーだい」

「なんですかなんですか。魔力の量というより質が変わつたというか、全部変えられたらなんかお父さんに包まれた感じがして一瞬イキ

かけたというか、もう訳わかんないです。なんなんですか。もうお父さん好きです。絶対離れないですからね。私を虜にしたこと後悔しないでくださいね』

Oh……。めっちゃ早口。しかもちよつとモゴモゴしてる。でもお父さんスペック高いから全部聞こえるんやで。私もカーマちゃん好きだよ。

なんか魔力が全部お父さんので入れ替えた弊害か、匂い中毒が悪化したのか？ 有り体に言うと同調？ だろうか。どちらにせようまく行つたようで何より。

「じゃあ冥界もどるー？」

「そうね。後は戻りながらおつきいカーマちゃんの方に魔力戻してあげるだけだから、そろそろ行きますか」

一段落したところでお早いお帰りだ。余計に居座る必要も無いしね。

帰つたらエレちゃんにもハグしてみよう。この匂い中毒がカーマちゃん特有なのかなちょっと調べてみたいし。

## 9. 確認

さあ帰つてきました、ホーム冥界。どうやつて帰つたかはとりあえず「単独顕現」つて言つとく。便利だね。このスキル。

「エレちゃーん！　ただいまー！」

「きやつ！　もう、お母様。飛び付いてきた危ないでしよう」

「えへへー」

もうね、この光景だけで生きてる実感湧く。帰つてきた感じする。「あれが冥界の女神様ですか……。どちらかというと私とは正反対なマジメちゃんな気がするのですが」

「そうだねえ。性格的にはだいぶ真逆じゃないかなー」

片方は冥界を管理する女主人として、自らを律して自分に厳しく、他人にも厳しくを地で行くエレちゃん。

もう片方はその弓矢を持つて人の恋情を呼び起こす、どちらかといえば規律を乱すタイプのカーマちゃん。

うん。真逆だねこれ。

人間だつたら自分の持ち得ないモノに惹かれるとかそういう話もあるし、何処かしかで繋がりが持てそうな感じするけども……。それぞれ権能持ちの神様同士で性質が違うと流石に仲良くは無理かなあ……。

「まあ私に嫌なことしない限りは仲良くしますよ」

「おつ、意外と前向き」

意外や意外、カーマちゃん様が突っぱねる事はないとの事。

これが……成長つてモノなんですかっ！（早い）

「それに私はどつつかつていうとお父さん派です。あちらは見るからにお母さん派でしよう。お父さんの匂いが嗅げるなら別にどうでもいいです」

「だから私の背中から離れないのねカーマちゃん」

台無しである。むしろ成長して無かつた。

というか可愛いなカーマちゃん。抱つことか横抱きじゃなくておんぶを選択する事によつて、お父さんの両手が空くように考えてるでしょ？お父さんにはお見通しなのです。お父さんの事も考えつつ、自分に最大限メリットのある行動をしている。もしかしなくても悪女ちゃんですね。可愛い。

とりあえず私もエレちゃんに挨拶しておかないとね。挨拶は大事。家族のコミュニケーション。

「ただいまエレちゃん」

「おかえりつお父様！　申し訳ないけれど、お母様をどうにかしてくれませんこと!?」

「うおー、かわゆいぞー！」

頭に登つてエレちゃんの髪をわしゃわしゃしてる。ティアちゃんは基本娘に嫌われるような事しないし、エレちゃんも存外悪いようには感じないでしょ。ウチの嫁さんは甘えるのと甘やかすのは得意分野だからね。

とはいえたままだと話が進まんのよティアちゃん。

「ティアちゃん。帰ってきた目的忘れてるぞー」「むつ！　そうだつた！」

そのままトテトテとこちらに寄つてくるティアちゃん。ティアちゃんにとつてはここはホーム。居心地がいいのだろう。他所へ行くと私の肩からなかなか降りないからね。

「さてエレちゃん。こちらお持ち帰りした新しい家族！ カーマちゃんです！ 仲良くしてね！」

「カーマでーす。インドの愛の神でーす」

私の前に立つカーマちゃんが心底やる気なさそうに自己紹介。とつてもダウナー。思わずこつちもあんな感じになつちやいそう。「……お持ち帰りですか。まあお父様の奇抜な行動は今に始まつた話じゃありませんし、そこまで驚きはしないのだわ。こちらも初めまして。あなたの紹介に倣うのであれば、私は古代メソポタミア神話の冥界の女神ですわ」

対峙するカーマちゃんとエレちゃん。  
初手喧嘩カードは勘弁してね……？

「なんか第一印象とは違いますね。とつても苦労してそうな感じがします。苦労人気質な感じが。ちょっと共感しちゃいますね」「あら、あなたもそう思つたの？ 奇遇ですわね。同じ親を持つて振り回されそうな感じがすごくシンパシーを感じるのだわ」

そこからは無言で近寄り、静かに握手していた。  
うん。仲良ければそれでいいや！  
つとカーマちゃんが離れた隙にティアちゃんが私の肩につ。  
振り返りそれを見たカーマちゃん。

「ちよつとお母さん!! そこに乗つたら私はどこに乗ればいいのです  
！ 今すぐ退いてください！」

おおう、すごい剣幕。つていうか乗るつて。私は乗り物か何かか。  
対するティアちゃんは。

「カーマちゃん。今から特訓だよー？　お父さんはしばらく離れるのよー？」

特訓をダシにして独占し始めましたよこの嫁。可愛いなあ。もしかして独占欲出ちゃいました？　ティアちゃん。

言われて顔を歪ませて「ぐぬぬ……」と呟くカーマちゃん。可愛いかよ。

あつ、そういえば。

「エレちゃんエレちゃん」

「？　なあにお父様？」

「ちょっと調べたいことがあるからちょっと近くに寄つてもらえるかな」

首肯して近付くエレちゃん。そのまま軽く抱きしめてみる。

「ちょ、ちょっと!?　お父様つ急にどうしたのだわ!？」

慌てるエレちゃんに耳元で囁くように説明する。

「実はカーマちゃんがお父さんの匂いを気に入っちゃったみたいですね。中毒みたいな症状になってるんだ。これがカーマちゃんだけなのか、家族共通なのか調べたくてね。個人差はあると思うけど、この状態でどう感じたか教えて欲しいんだ」

あくまで落ち着かせつつ。

ティアちゃんはなんとなく安心できる匂いと言つていた。

安心感を与えるだけなのか、それとも人によつて感じ方が違うのか。

そもそも匂い 자체が嗅ぐ人によつて「いい匂い」か「くさい」かが如実に現れるものだ。世の中に「匂いフェチ」という言葉があるように、いい匂いであるかどうかは人によつて千差万別なのである。

今回の場合、若干どころじやなく匂い中毒なカーマちゃんとの匂いに関して対比検証のためエレちゃんに抱きついてみた。

さて、ここまで理屈つぽく説明しましたが。実のところ結果は囁き途中で出てるのです。

「エレちゃんにとつても、臭い匂いつて訳じやないみたいだね……」  
「……（すんすん）」

囁いてる途中で背中に手を回し始めたので、半ば確信していた。コレはもう子供たち限定の魅了スキルに他ならないレベルなのでは？エレちゃん結構強めに抱きついてるし。

「むううう！ ライバルが増えるううう！」

後ろでパンス力怒るカーマちゃん。ティアちゃんにお預け食らっちゃつたからね。

でもエレちゃんを中毒化させる訳にもいかない。エレちゃんは冥界の女主人。私たちの家を守る娘なのだ。

悪い意味合いで言えば常にお留守番の係なのだ。

もし中毒になってしまって、お留守番をさせられ続けたらどうなると思う？

考えるまでもない。ぶつ壊れる。下手したら廃人コースだ。

タバコ中毒然り、アルコール中毒然り、ヤク中毒然り。強制的に取り上げた所で辞められないモノ。

上記挙げたものはそれなりに数がある分、1種類取り上げても違う種類で……となり基本止められない。

しかし今回検証している「お父さんの匂い」に関しては、今後どうなるかは別として、現状お父さんしか出せないモノであり。代替が効かない。

なので多少手遅れかもしれないが、エレちゃんには早々に離れてもらう。

「ありがとうエレちゃん。よく分かつたよ」  
「……（ぱー）」

「おーい、エレちゃーん？」

あれ？ もしかしなくても重症じゃね？ 即効性高すぎるので。

(現実逃避)

「はっ!? ……今ちょっと意識が……」

「いや、もうそれ怪しい薬レベルだよね。大丈夫？ 勦い喰ぐ？」

「……ちょっとだけいいかしら？」

「ダメに決まつてんでしょ。これ以上酷くなつたら取り返しが付かなくなるよ」

約一名取り返しがつかなくなつて嫉妬でパンスカしてるけど、この症状を知らなかつたからノーカウントでお願いします。

さて、脱線しまくつたけど、本来の目的を達成しないとね。

「エレちゃん。この周辺で被害が出ても大丈夫そうな場所とかある？ 被害はなるべく抑えるけど、万が一って事もあるし」

「そうね……じゃああの辺りの暗い所周辺だつたら構わないのだわ。最近空いた所だし、檜櫻置くのにもまだ土地が悪いから好きにしてもらつていいわよ」

そう言つて遠くの方を指差すエレちゃん。

さすが冥界の女主人。冥界の事なら土地の状態から、流れ着いた死者の魂の状態まで把握しているだけはある。これだけ頑張つてのに自分は後回しでこの地に住う魂の事を優先に考えてる。凄い。もうとにかく凄い（語彙力）。

なんか頭撫でてあげたくなつてきた。でもさつきの一件もあるし自重しないとね……。

「そうだ。こういう時こそ。

「ティアちゃん。ゴー！」

トテトテと駆けていくティアちゃんそのままエレちゃんの身体を登つっていく。

「ちょっと!? お母様!? ど、どうしたのだわ!？」

「なでなで……むふー。頑張つてゐるエレちゃんにいいこいいこなのです。なでなでー」

私が甘やかしたいと考へた時、ティアちゃんも甘やかしたいと思っているのだ……。

エレちゃんは元々ティアちゃんがお母様だからね。甘えたいし甘やかしたいティアちゃんが大好きな自分の娘の頑張りを褒めない訳がない。

「が、頑張つてると言つても……私にとつては当たり前の事なのだわ」「その当たり前を当たり前に出来ることは中々出来るモノじやないさ。大人しく撫でられなさい。撫でさせないとティアちゃん拗ねちゃうし」

「そうだぞー。私もブンブンぶいーってなるからなー」

なにそのブンブンぶいーって。なんとなく伝わるけども。可愛い。だけどこうやつてイチャイチャしてるとね……。

「ぐぬぬぬぬぬぬ……。私もお父さんに撫で撫でして欲しいですうー！！匂い嗅いで生きていたいんですうー！！ えこひいきは良くないと思ひますううう——！！」

欲望と嫉妬がダダ漏れのカーマちゃん（愛の神）がおこでいらっしゃるよ。こうなつちやつた原因の私が言うのもアレではあるけど、重症だなあこの子も。どっぷり浸かつちやつてるね。

「じゃあカーマちゃん。一つ提案をしよう」

「う、う、う、う、う、……なんですかあー!!」

「カーマちゃんがこちらの課題を1つクリアする度に10分、私からの撫で撫でタイムを」

「早くしてください。お父さんから貰つた力です。3日と言わず1日でモノにしてみせます。だからモノに出来たらお父さんの背中に抱きつく権利は私のものですよ！ お母さん！」

クワッとティアちゃんを見るカーマちゃん。

「私は肩車だからいーよー。1日でできるかなー？ お母さんも期待しちゃうぞー」

「ふふふふ……速攻でモノにしてみせますよ……」

わお。これが中毒患者かあ。傍から見ればチョロつチョロの駄女神なのに、娘だと思うだけで可愛く見えてきちゃう。私も大概親バカしてるなあ。

んじやあご褒美も決まった所で、特訓しに行きますかあ。

「じゃあエレちゃん、これからカーマちゃんの特訓に行つてくるね。ティアちゃんはどうする？ そこからでも見えるだろうけど……」

「むふーん。私はエレちゃんとイチャイチャするのです！ カーマちゃんはお父さんが好きみたいだし、2人で行つてらっしゃーい」

「お母様もこう言つてますし、行つてらっしゃいまし」

「やりました！ 2人きりですよ！ こつちも負けずにイチャイチャしますよ!!」

「はーい、本筋忘れないようになー。2人きりつて言つてもラフム君も一緒だけどねー」

『ハーアイ』

「がつでむ!!」

隙あらばお父さんの匂いを嗅ごうとするカーマちゃん。しかしメインは能力制御の訓練だ。

まずは魔力に馴染む所からかな。こちらにお持ち帰りする時に完全に中身を挿げ替えてしまつている。今の状態で十全に身体を動かせるようにならなければ話にならない。

それからは新しく出来ることの確認。今までできたことに加えて、今まで以上の魔力量があることで、出来ることが増える、或いは新しく何かできるようになるかもしれない。

そちら辺の確認とカーマちゃん本人の調整が今回の目的である。

カーマちゃんも言つてるけど、早く終わるならそれに越した事はない。あまり長くなるとティアちゃん……はエレちゃんと一緒にいるだろうけど、エレちゃんの方が保たないかもしれない。主に心労的な意味合いで。

「お母様!? ちょっとそつちには行かないでくださいます!? 」  
「うおー！ こつちでエレちゃんをバカにする声が聞こえたぞー！」

出てこーい！ ボコボコにするぞー！」

「お母様がまともに暴れたら冥界が大変なことになるのだわー！?  
誰か助けてー！？」

うん。ここまで幻視した。眞実にならないことを祈るばかり。

「よしじやあカーマちゃん。背中に乗る事をお父さんが許可します。  
代わりにお父さん現地まで飛びます。しつかりお父さんの魔力の流れを覚えて訓練に活かすように。匂い嗅ぐのに夢中で覚えてないと  
かはナシだよ？」

「ううう、そんなの生殺しじゃないですかあ！ お父さんの匂い嗅いでて集中なんてできるわけないですよお！」

つて言いながら背中にはしつかり乗るカーマちゃん。

欲望に正直だなあ。お持ち帰りする前はだいぶ捻くれてた感じ  
だつたのにねえ。これも成長なのかなあ。（親バカ）

「あれだけの啖呵を切ったのだし、頑張るしかないぞ。さあ、訓練の始まりだ！」

「はあ……。吐いた言葉は戻せません。潔く頑張りますよ」

さて、何日かかるか。言葉通り、頑張つてもらいますかね。

10. 結果

かくかくしかじか。

卷之三

カーマちゃんの訓練が最終段階です。カーマちゃん本人が「餌に釣られて」本気で頑張っていたので、魔力関係の習熟とカーマちゃん魔改造も含めて3日で終わりそうです。

啖呵を切つた通りに、お父さんの魔力の順応に関しては1日で習得。追加で出来そうなことの洗い出しに1日。それらの習得に1日。最後に残つた時間で今しがた最終訓練前の詰めだ。やつぱりカーマちゃんはご褒美があるととても動けるタイプのようだ。

事実ご褒美が無かつたら多分1週間かかつただろうね。

こちらにお持ち帰りしてからとつても欲望に素直になつてたけど、訓練中にチラツと聞いてみたらこんな事を。

いやあ。ラフム君×100（さつき10体追加された）を相手に覚

えた技術を全て駆使して生き残る、最終訓練中に息を切らしながら言つてくれた時は思わず抱きしめたくなっちゃつたよね。訓練中だから抑えただけど。

この訓練の前に今まで覚えた技術は習得済みだ。しかし実戦になるとどうしても慣れた技術、やり方を選択しがちだ。それは座に登録される英靈とて同じ。むしろ英靈だからとも言えるか。この方法なら、という文字通り「必殺」の技、方法があるものだ。

しかしカーマちゃんに教えた、もしくは生み出したものはそれらの「必殺」に比類する力であることは間違いない。しかし力を得ても適所で発揮できなければ意味がない。

そこで極限状態を作り上げる。今までの技術プラス得た技術を駆使しなければ切り抜けられない窮地。絶体絶命。それが現在のラフム100体組み手なのだ。

ちなみに鬼教官と化したラフム君の采配によつて、弱音を吐くごとにどんどん体数が追加されていつて今現在110体です。おかしいなー。最初は30体だつたんだけどなー。

でもラフム君も考えなしに追加してるのでなく、カーマちゃんがギリギリ対策できるであろう隙間を縫つて追加、攻撃を繰り出してい る。

対するカーマちゃんは対応する中で得てきた技術を、息をするのと同然のレベルで昇華してきた。だからこそ今対応できるラフム110体。魔力は私譲りとはいえ、ここまでできるようになつたのは彼女自身の素質、努力の賜物である。

とはいえてここまで来ると動き云々は関係なくなつてくる。単純に身体一つだと対応出来なくなつてくる頃合いだ。そろそろか。「カーマちゃん。最終テストだ。アナルガ身体無き者ケイオスタイルと混沌泥の使用を許可する。ラフム君300体相手に1時間以上持たせること。倒して数を減らしてもOK。スタートは1分後。いつでも動けるように準備しておいてね」

「ふつ、ふつ、ふ、ふううううつ!!! お父さん！ 30秒！ 抱きつく許可を下さい！」

「よしついいぞ！ ばつちこい！」

ガバツ「（ほわああああああああ！！）」（籠もつた声）

禁欲からの解放（30秒）である。若干発狂じみてるけど、この後1時間以上確定でお預けだ。しつかり喰いでおくんだぞカーマちゃん！

「カーマちゃん頑張ってるねー。よしよーし」

様子見してたティアちゃんも、懸命に頑張るカーマちゃんを見て嬉しそうだ。ちやつかりこつちまできてカーマちゃんをなでなでしている。いつ見ても癒されますな……。

「さすがの私でもこの訓練はムリですわ……。順調に人外に足を踏み入れてきてますわね……」

『ふむ。300体ともなるとこちらもしつかりと動きを統率しないと共倒れするかもしませんね。ちょっと訓練中は統率に集中するので、しばらく動けなくなりますね。お母さん。魔力も少し回していただきたいので、中に入りますよ』

「ばつちこーい！」

そういうつてティアちゃんの中に入つていくラフム君。現場に残り静かに佇むラフム君×300体がとつてもシユール。あれだけの数を任意で干渉のないように動かそうつてんだからラフム君も大概ハイスペックだよね。

そんなこんなで30秒。カーマちゃんの方も準備の時間だ。

「さて30秒経つたよカーマちゃん。しつかり出来たら膝枕でこつちに顔向けて眠らせてあげよう」

「なんですかその欲張りセット!! 私をイキ殺すつもりですか!! 超頑張ります!!」

カーマちゃんにとつては欲張りセットらしい。お父さんキメてるなあ。（遠い目）

ちなみに。

カーマちゃんが現在身体無き者<sup>アナルンガ</sup>で扱い切れる分体は、本体含め3体までである。なぜ3体なのかと言うと、カーマちゃんの見てない所でお父さんに甘えてきて使い物にならなくなるのである。なんだよ。

可愛いかよ。

ラフム君がどういう戦法を取るかは分からないが、下手すれば操れる分体を増やさないと対応しきれなくなる可能性はある。数の暴力とは恐ろしい物で、3対300と5対300でも雲泥の差だ。それがカーマちゃんのような1人あたりの戦力が高いのであるなら尚更。

ちよこつとだけ、そこら辺の強化も出来ないかという期待もして。まあ増やしすぎるとマーラ側面がいつ浮上するか分からないってのもあるみたい。（カーマちゃん談）マーラ側面が無いとは言つても、不純物程度に0.00……01%くらいの低い確率で出る可能性はあるから、制御できない内に出したく無いとの事。

ぶつちやけ出てきてもお父さんとお母さんならどうにかできるしどうにかかるだらうけど。つてかその確率だとほぼ出ないでしょう。えつ？ お父さんがティアちゃんに選ばれた時点で幸運EXの可能性がある？ あとビーストだから惹かれやすい？ んーそう言われるどぐうの音も出ない。思い当たる節が多すぎる。

『よいしょつと』

およ？

「ラフム君、出てきて大丈夫なの？」

『ええ。ちよつと考え方を変えてみようかと。何も全部自分でやる必要ないかな、と思いまして』

ラフム君悪い顔してる。（当社比）

『まず300もいるので、30体ずつ分けて統率個体を置きます。10の班に分けられるので、内5班は通常個体、内4班を飛行形態にします。これで攻撃の干渉を抑えます』

「うわあ、考えたくもない布陣。残り1班は？」

『デバフ班です』

うわあ。いい顔してんなあ。イキイキしてるぜラフム君。

『常に相手の動きを統率個体で共有。動きの干渉を防ぎ、相手がノつてきた所でデバフを撒く。デバフ班はピンポイントデバフ以外では常にケタケタ笑いさせときます』

うん。無理ゲーじゃね？  
さすがラフムメインA.I.。考えることはえげつない。

『x Z g k f うd f げwえqう? 6 j 5 qあk f qおぎg qえr.  
c @』

『6 j 5 f うい s q q t Z wえ. k q@9』  
『え g.j r 9). え g.j r 9)えへh』

あっちではラフム君達が会議中だ。話していた通り、内4割の120体が変形して飛行形態をとっている。正式名称で言うところのベル・ラフム君か。

対するカーマちゃん陣営は。

「…………。(ゴゴゴゴゴゴ…………)」

なんか分体含めオーラがハンパない。そんなにお父さんの膝枕が良いのか。カーマちゃん分体は、本体カーマちゃんがアレ（匂い中毒末期患者）なので、例に漏れず分体もその影響を受けている。  
そりやもうとつても。

試しに10人になつたら、元本体のカーマちゃん以外全員でお父さんにアタックしてきたくらいである。とつても欲望に忠実。  
1人出遅れてベソかいてたカーマちゃん可愛かつた。それを慰めてたティアちゃんも可愛かつた。

基本的にカーマちゃんの分体といつても、分かれた分体もカーマちゃんと同じような物で、分身の方が近いかもしれない。全く同じ人間が1人増えるような感じなので、元々増やしたら自由に動き出してしまうのだ。

それに待つたをかけて、本体と同じ目的を持たせられるのが、前述した通り3人（カーマちゃん含む）なのである。

その3人が考えうる最高のご褒美目の前にぶら下げられたのだ。  
やる気に満ち溢れてらつしやる。

さて両者準備が整つた。

ルールは簡単。1時間耐久デスマッチ。

カーマちゃん側の勝利条件は生き残る事。戦闘中に頭数が増えた場合は、増えたカーマちゃんが残つても勝利とする。最終的にカーマちゃん側が1人でも残つていればOK。

敗北条件はカーマちゃん側の全滅。全員戦闘不能になつた場合負けとなる。

ラフム君側の勝利条件は1時間以内にカーマちゃん側を全滅させる事。増殖増減数は300上限。カーマちゃん側に数を減らされた場合上限値まで追加投入OK。頭数が変わらなければ形態変化も可とする。

敗北条件はカーマちゃん側が1時間生き残つてしまつた場合と、ラフム君側が増殖出来なくなる状況に陥つた場合。何かしらの可能性で全滅した場合はその時点で負けとなる。

増殖可ではあるが、外からの追加投入は無しとする。戦闘中の300体の誰かが増殖して増える場合のみOKとなる。

うーん、耐久の時点でのラフム君側が若干不利？ でもカーマちゃん側の耐久するだけのスキルは今の所無いし、唯一耐久で使えそうな混沌泥ケイオスタードに潜つて潜伏するのも、ラフム君も潜れる時点で意味を為さないから五分五分くらいか。

いずれにせよ一筋縄ではいかない。ラフム君が飛行形態を取るのもカーマちゃん戦では初だし。ここからの戦いでカーマちゃん側にとつて初めての動きをされると考えると、1回のチャレンジで終わる気がしない。

もしカーマちゃん側が全滅した場合は、カーマちゃん陣営が復活後、5分経つたら再開のルールも追加しよう。是非とも1発突破して欲しいけども、念には念を入れて、ね？

結論。ラフム君鬼畜でした。

「はあ!? デバフなんて聞いてないですよ!? そんなの反則ですつてえ??!!」

『ルールには反してませんよ』  
「余計にタチが悪いですう!!!」

「飛行形態ウザすぎです! 地上の隙間を縫うように攻撃されたらどうしようもないじゃないですか!」

『人の形を保っているから避けれないんですよ。体に当たりそうな部分を混沌ケイオス泥サイドで補完すれば幾らでも避けれますって』

「それは人間としての最後の一線超えてるんで遠慮しますう!!!」

「なんで単体から増殖するんですか! 数増えてません!」

『状況に合わせて通常形態と飛行形態の数は変動しますけど、総数は変わつてないのでルール違反ではないですよ』  
「倒しても倒してもキリがないんですけどおおお!!!」

「……………」

『ああ、到頭喋る暇さえ無くなりましたか。デバフ班は音量上げて、どうぞ』

「あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、!!!!」

ラフム君のブートキャンプも何回目になつただろうか。

『今87回目ですね。日付で言うと4日目になります。そろそろ行けそうですが』

ちゃんと数えてたのね。

長くなつたからちやつかりティアちゃんが先にお父さんの膝枕堪能中ですけども。ツノはどうしたん？ あつ、魔力で一時的に消してる？ そこまでして膝枕して欲しいか。

「カーマちゃんがして欲しい理由がなんか分かるね〜」

とはティアちゃん談。

そして今現在経過時間は57分弱。もうすぐ1時間である。

速攻でやられちやつたり、氣絶してる時間が長かつたりでかかつた時間がバラバラだつたけど、ようやくここまでこぎ着けたつて感じ。ぶつちやけラフム君相手だと本来彼女のメインウェポンである弓矢の効果は完全に無効化されている。なので今回手に入れた混沌泥を経由した瞬間移動と、移動先を増やす為に編み出した、矢尻に混沌泥ケイオスタيدを付与させて放つ技。

あと一つが途中ラフム君が言つてた、体を混沌泥ケイオスタيدで換装する技。

こちらは本人が嫌がつてた。

「混沌泥ケイオスタيدに潜るだけならまだしも、体そのものを変換するなんてどうかしてるんじゃないですか？」

つて叫んでた。うん、言いたい事は分かるんだけどね？ そもそも混沌泥に触れるだけでもクツソ危ないのは理解してるのかな？

そう。お父さんの魔力経由とはいえ、カーマちゃんは擬似的に混沌泥ケイオスタインを操る事が可能になつていて。普通の相手だつたらコレ使うだけで大体どうにかなるからここまで訓練する必要あるかな? つて感じなんだけど。カーマちゃん曰く。

「私がお父さんの1番になるんですうー。どうせお父さんの事だから、私と同じようにお持ち帰りしてくるんでしようし。私が1番最初にお父さんの娘になつたんですから、今後誰が妹になろうと私が1番つてマウントつってやりますっ」

つて言わされました。おいおい。お父さん嬉しくて泣いちやうんだけど。

そして色々人外に足を踏み入れて、色々吹つ切れたカーマちゃん。ラフム君のほぼ全ての攻撃を混沌泥ケイオスタイン透かしできるようになつた模様。それも常時発動である。そう、パッシブスキルで無限回避みたいたなんだ。

しかもラフム君だからそれを切り裂きに行けるけど、普通の人だつたら手を出した途端混沌泥ケイオスタインに侵されて終わりつていうね。それを1時間近く保てるつて……。

「立派になつちゃつてえ……？」

『むしろドコに向かつてるんですけどね彼女。方向性見失つてしません?』

それを推奨してた君が言うのか……。  
そんな話をラフム君としてたら。

『1時間経過ですね。おめでとうございます』

ようやく最終試験が終了しました。カーマちゃんは大丈夫?

「……オトウサン……オトウ……サン……?」

逝きかけてらあ!? ちょ、待てよ。(動転)

「へい! カーマちやーん! こつちこつち! come on!

「オトウサン……？　……おとうさん……お父さんお父さんお父さん  
!!」

虚な目でフラフラとしていたカーマちゃんは、お父さんの声が聞こえたのかこちらに向かつて一心不乱に走り出してくる。

ボフフ

「お父さん……お父さん……えへへえ……私ちやんと出来ましたよね……？　お父さんから貰つた力……ちゃんと使えてましたよねえ？　ふへへえ……」

「よしよし。ちゃんと使えてて偉いぞー。今日は思う存分甘えていいからなー」

壊れたラジオの様に「お父さん……」と「ふへへえ……」を繰り返すカーマちゃん。極度の疲労と匂い中毒が相まってヤバい事になつてる。

「……このまま寝てもいいですか？」

「頑張った褒美だしね。思う存分甘えていいんだぞー」

そのまま静かに寝息を立てて寝てしまつたカーマちゃん。流石に約4日間ぶつ通しは辛かつたんだろうね。頑張った分しつかり休んで欲しい。

カーマちゃんが起きたらどうしようか。またティアちゃんを連れてどこかに行こうか。カーマちゃんも連れて。

『……あれ？ よく考えたらお父さんの1番最初の子つて私が置いてきたラフム $\alpha$ なのでは？』

「あるえ？」

## 11. 顕現

ラフム君に言われるまで完全に忘れてた。

そう、私の体の中にラフム君が1体いるんです。ネタじやないぞ。まだ能力のコントロールが下手なのか自分の中にいるラフム $\alpha$ の存在を自分で感じ取れてないけど、ラフム君が居るつて言うには居るんでしょう。

そして私の体の中にいる以上その子も私の魔力の影響を受けるわけでして……。

ラフム君の言う通り、おそらく私の中にいる子も十中八九私の魔力でできた、ティアちゃんの子とはまた違った子になつてているはず。

その進化の先というか、この子がなるかも知れない未来の姿はまだ未知数。ラフム君の特性を受け継いで、尚且つ私の魔力に影響された何かになるのか。又は私達が想像していない全く別の何かになるのか。

考えてきたら気になつてきた。

『私達は多かれ少なかれ、母さんの影響を受けてます。その時の感情、記憶、環境、その他色々。それに加えて塩基契約アミノギアスによって母さんから固有のスキルを与えられて生まれています。母さんの中では今母さんが見ている光景と、昔の記憶などが映画の様な感じで見ることが可能です。新しく成形される子達はこれらの周囲環境によつて様々に変化しています』

「要するに映画館?」

『まあ環境だけ言えばそれが1番近いかと。父さんが前世の記憶を持つてる事も、最初入つたときに把握しますよ』

あら知つてたのね。隠してるつもりは無かつたけども。

「ん? つまりさ。私の中に居るラフム $\alpha$ が、私の前世の記憶から誰

かの姿を模倣して出てくる可能性があるってこと?』

『……あー。それはありそうですね。父さんに好かれたくて、思い入れの深い人だつたり、キャラクターだつたりに寄つた姿。或いはそれとほぼ同じレベルのコピーをしてくるかもです。さつきカーマさんが1番1番騒いでたのは絶対聞いてたと思うので、嫉妬というか。好きやすいキャラになつて出てくる可能性はめちゃくちゃ高いです』  
おうふ。つまりあれだ。前世でやつてたゲームのキャラとか、そういうところから姿を引っ張つてくるかも知れないわけだ。

しかも自分が好きだつたキャラ確定で。

限定確定ガチャとか何それ。インフレージян。

さて、そんな話をしている最中、宣言通り膝枕（お父さんのお腹に顔埋め中）されながらティアちゃんになでなでされてるカーマちゃん。寝息の筈なのに結構大きめに息をスーサーしてるからなんかモゾモゾする。ちなみに右太ももを占拠中。

さらに言うとその反対側の左太ももの方には、いつの間に居たんだかティアちゃんが。こちらはお腹に顔を埋めたりとかはしていないが、とても幸せそうな顔をしている。

目の前で2人の娘が膝の上に座り、片方が片方を慈愛の表情でナデナデする。なんで私の膝の上でやつてるんだい。いいぞもつとやってくれ。

話が逸れた。問題のラフム $\alpha$ の事ですが、ラフム君にお願いして引つ張り出してきてもらう事に。

私の中に居るのは全然構わないんだけど、今現状私が中の状況を把握できないつて所が問題。今後増える可能性があるし、私の中の確認ができる様にしておかないと、今後何かと不便になると思われる。なので、今居るラフム $\alpha$ に協力してもらおうと思ったのです。

おつってきた……けど?

『いやあ……うん。分かるんだけど、難しいというか……』  
「どしたのラフム君」

何やら神妙（当社比）な顔して出てきたラフム君。どしたん。説得失敗？

『……父さんには名前をあげた方が分かりやすいかもしないので言います。中に居るラフムαはジャック・ザ・リッパーになつてます』

「…………あー…………ああー…………」

切り裂き・ジャック・ザ・リッパー。生まれる事を許されなかつた子供たち、その集合体。そして彼女が聖杯ケイオスタッドへ望む願いは胎内への回帰。……ある意味お父さんやお母さんの混沌泥ケイオスタッドの中に居るつて事は胎内に居るのと近いのでは……？ つまり……。

「願い叶つちゃつたじゃん」

『中の彼女的には父さんの中こそが自分の居るべき場所だとの事で、出たくないみたいで。どうにも説得しようがないんですね……』  
わあお。どおりで出てこない訳だ。だがしかしその話を聞いた私がそれを許すと思っているのかなあ？

お父さんはお父さんです。お父さんとして子供たちを甘やかす責務があります。責務つてなんか言い方がアレだから、「甘やかさないと死んじやう」とでも言つておこうか。  
生まれる事を許されなかつたと？

ふざけるな。

生まれた子達に責任なんてない。生まれたからにはこの世に生きる権利、生を謳歌する自由がある。それを私たち大人が捻じ曲げてはならない。

ジャックちゃんの存在として中が良いのは構わない。だがこちらも「子供達を愛する事」が存在理由であるのだ。今までは自分の中の様子が分からなかつたので仕方ないかもしないが、中の様子が分かつた今、ジャックちゃんを愛し、ジャックちゃんが生まれてきて良かったと思えるようにするのが私の役目だ。

中の様子が分からないから手が出せない？ ジャックちゃんが望んで居ないから出てこない？

良いでしよう。それがジャックちゃんの選択でありやりたい事なのであれば咎めはしないさ。

でもね？ ジャックちゃんは自分の望みを叶えて好きにやつてるんだろう？

じゃあ私も好きにやろうじゃないか。

「ティアちゃんティアちゃん。ちょっとカーマちゃん預けていいかな？」

「うーん？ ……あー、なるほどね！ りよーかいなのです！」

さつすが私の嫁（娘）言葉に出さずとも思いが伝わる。以心伝心つてやつだ。

「もしもの時はよろしく」

「あいあいさー！ つとと、大きい声出したらカーマちゃん起きちゃうね。よしよーし。良い子はねんねだよー」

「……むにゃ……んむう……」

モゾモゾしながらむにゃむにゃするカーマちゃんと、それを慈愛の表情でなでなでするティアちゃん。いいなあ。ずっと眺めてたい。

しかし私の仕事はこれからです。

自分の中の存在を強くイメージ。そして、徐に自分の体の中に手を突っ込む！

『わあお、躊躇しませんねえ』

イメージするのは自分の中にいるであろうジャックちゃんの姿。このまま引っ張り出してもいいんだけど、それだとジャックちゃんに悪影響しかなさそうなので、とりあえずなでなでします。

なでなで。わしやわしや。ふにふに。むにー。

そしてしばらく続けて食い付くのを待つ。なでなで。  
そうすると……おつ！

お父さんの手を僅かにだが自分に押し付ける様に掴んだのを確認。そのままお父さんの方に引っ張り上げる！

ぬるう。

ポンッ！

「うひやあ!?」

飛び出してきた（おそらく）ジャックちゃんと思われる女の子！  
すかさずお父さんに抱きかかえてなでなでを再開するつ！  
なーでなーで。ついでに抱きしめておく。

「サルベージ成功。初めましてだね、ジャックちゃん」

「ええ!? なんでお外!? なでなで……はきもちいけど、お外はヤだ  
よお!?」

「はーいはい落ち着いてー。お父さんが居るよー。怖くないから  
ネー」なでなで

若干錯乱しているジャックちゃんを暴れないように抱きしめ十な

でなでで落ち着かせる。私の中の居た以上、問答無用でこの娘は私の娘です。そしてつ！ 私の娘である以上、こうされて落ち着かない娘など居ないので！ なでなでわしやわしや。

「おとう……さん……？ おかあさんじや……ないの……？」

あるえ？ ちよつと震えてらあ。ちよつとお勉強の時間かなあ？

「そうだよ？ お父さんはお父さんだ。子供が生まれるにはね？ お母さんと一緒にお父さんっていう人がいるんだ。ちなみにジャックちゃんのお母さんはあそこにいるティアちゃんだ」

と言つて私はティアちゃんの居る方を指差す。ジャックちゃんはその方向を向くと、笑顔で小さく手を振るティアちゃん。

「おとうさんはおとうさんで、おかあさんはおかあさん？」

指差ししながら自分で得た情報を反芻するジャックちゃん。ゆっくりと飲み込ませるように伝える私。

「そうだよー。お母さんはお母さんで、お父さんはお父さんだ。私達はジャックちゃんが生まれてきてくれたことをとつても喜んでいるんだ」

「……そんなことないもん。おかあさんは私は生まれても喜んでくれなかつた。だから私は……私達は、生まれてきちゃダメなんだよ……」

そういつて悲しそうに顔を伏せるジャックちゃん。

違うんだよジャックちゃん。

君はもつと自分に素直になつていいんだ。

脇の下からジャックちゃんを持ち上げてこちらへ向かせる。ジャックちゃんの目を見て静かに言葉を紡ぐ。

「……ジャックちゃんが初めて生まれた時、最初のお母さんは君を拒絶したかもしない。でも今のお母さんは、その時のお母さんとは違うんだよ。お母さんも、そしてお父さんも。君が生まれてきたことにとつても感謝しているんだ。だからね？ 私の中に居るだけじゃな

くて、お母さんとお父さんにその可愛い顔をいっぱい見せて欲しいんだ

「……私も……ここにいても……いいの……？」

おそるおそるといった感じでこちらに聞き返してくるジャックちゃん。

「もちろん。いつでも私達に甘えていいんだよ？ なんならお母さんの所に行つてみて。そしてジャックちゃんから呼んであげてよ。お母さん、てね？」

そつと。ジャックちゃんの背中を押してティアちゃんの方へ向かわせる、カーマちゃんは静かにこちらへと引き取つておく。

おつかなびつくり。

しかしジャックちゃんは何より愛に飢えている。

少しづつ……少しづつ……

そして。手を伸ばせば届く距離。おそるおそる。言葉を紡ぐ。

「おかあ…………さん…………？」

静かに両手を広げるティアちゃん。

「おいで」

その一言で飛びつくようにティアちゃんへ抱きつくジャックちゃん。

「おかあさん……おかあさん！ おかあさん!! えへへ……。好き！」

「ジャックちゃん、生まれてきてくれてありがとう。私も好き。大好き。嫌だつて言つても一生離してあげないんだからね」

「うんっ。うんっ！ 離れないもん！ おかあさんも、おとうさんも、絶対離さないもん！ えへへへ……」

今のティアちゃんの「おいで」めちゃくちゃバブミ天元突破してない？ そりやジャックちゃん即落ちしますわ。

でも角で誤魔化されてるけど、あの子達身長あんまり変わらんぞ……。ティアちゃんの方が若干大きい……くらいかな？

『また1人、家族が増えましたね』

静かに呟くラフム君。

ジャックちゃんの生まれを考えれば元々相性が良かつたつて事もあるだろうけどね。何にせよ家族が増えるのは良い事である。

「そういうやあの子の場合特訓は要らないかな」

既にお父さんの魔力と順応済みだ。

最初一瞬ジャックちゃんか分からなかつた。恐らくお父さんの魔力と順応した事で見た目に影響が出たのだろう。なんか全般的に白色がメインになつて、髪の色がティアちゃんと同じになつてる。私も髪の毛は色変わつてるし、家族でお揃いだね。

それにしてもだよ。

「自分で自分が確認できないのは問題だなコレ」

『……確かに。今回の様なパターンは避けたいですね』

『またま他の子達が居なかつたというのもあるが、ジャックちゃん1人しかないと色々と不便そうではある。

中に居る子を増やしてお父さんと意思疎通取れるようにするべきか。

もしくは中の管理が出来そうな存在を調達するか。むむむ。

「ちなみにティアちゃんはそこら辺どうしてたの？」

『私が生まれる前は特にそこら辺気にして無かつたっぽいですね。他の子供達に聞きました。私が生まれてからは私が伝える形にしてます。外に出てても他個体から中の様子が見れるのでやりやすいです』なるほど。ラフム君の仕事量半端ないね、それ。

こちらも伝える要因というか。中の現状を知る術<sup>すべ</sup>が欲しい所。

今回の様な子供を寂しくさせる要因は起こしたくない。

ラフム君の分身が私の記憶を模倣出来るなら、ラフム君から分身を何人か貰つて私の記憶を元に何処か他のキャラクターを持つて来れないかな？

記憶を探る。何か適切なキャラクターは居たつけか……？

「……ラフム君。ちょっと2人……いや、今後を考えて3人かな。ラフム君の分身をこつちに頂戴な。良い案がある」

『お安い御用ですよ。なんなら中で増やせる様にしどきましょう』

「それ、いいね。こつちが要望した時に増えるようにしてもらえるといい感じ」

そうしてラフム君に分身×3を貰い、中に入つてもらう。すつざいモゾモゾする。

うち2人は誰にするか決まっている。残りは今後増やす時の予備要員である。

さあて、あの子達を生み出しましょかね？

## 12. 管理

生み出す子達は2人決まつてるので、中に入つた内2人は私の記憶から特定タイトルの特定キャラの動き、在り方、言動などを覚えてもらつて模倣してもらう事にする。

前世で感動したゲームのとあるキャラで、私の中の状態を管理、報告、都度対応できそうなキャラが居たのでそれを模倣してもらう予定。

ちよつと性格に難ありだつた気がするけど、お父さんの魔力に適応するだろうし、お父さんの子が他の子をいじめるとか考えられないのでは問題なし！ リスク確認、ヨシ！

『父さんも結構思い切つた事しますよね』

「結果よければ問題なし。コレが実現すれば得る物も大きいし、全然イケる」

実際本当にこの2人が生み出せれば心強いし、何より私が嬉しい。

1人目のジャックちゃんがどれくらいの期間でジャックちゃんになつたのか分からぬのがなあ。そこら辺の時間感覚も中と外で弄れないかしら。

とりあえず効果があるか分からぬけど加速しろと念じておく。  
倍ertzシユだ！

そして件のジャックちゃんですけども。

とりあえず中の管理者というか、伝達係ができるまでのしばらくはティアちゃんとイチャイチャしてもらう事に。ジャックちゃんの在り方的な意味でも相性は抜群。ですがこちらに問題ががが。

「……あの子なんなんですか？」

むすーっと。お父さんの膝でむくれて いる愛の女神が1人。

事情は説明したし、ジャックちゃん自身お父さんの1番とか気にしてない性格だから大丈夫かなーつと思つたんだけど、愛の女神様的にはそういう話じゃないらしい。

「あんなにはしゃいで1番1番言つてたのがバカらしいじゃないですか。恥ずかしいです。傷ついたのでお父さんの慰めを希望します」既に撫でてるんですがこれ以上を希望しますか。欲張りさんめ。しかしこの女神様を満足させるのにはどうしたらいいのだろうか。ハグじや足りなさそだし。かと言つて膝枕も現在進行形でやってるし。

「じゃあカーマちゃんが好きかどうか分からぬけど、お父さんが耳かきしてあげよう。あとは何か希望があれば耳元で囁いてもいいぞ」あつ、ちよつとカーマちゃんの体がビクンつて震えた。

「…………じゃあ私のこと愛してるつて、出来るだけお父さんが知りうる限りのイケボで囁いてください」

若干頬を赤らめながら言うカーマちゃん。本当にこの子は欲望に素直になりましたねえ。

前までのカーマちゃんだつたら「はあ？ そんな事で私が喜ぶと思つてるんですか？ 自意識過剰過ぎません？」とか言いそうだつたけど、今やそんな物見る影もなく。

じゃあご希望にお応えして。

「カーマ」

「ひうつ！ は、はい！」

「お前は本当に可愛い奴だな……愛してるぞ……」

「…………きゅう」

あらまあ。キヤパオーバーしてフリーズしちゃいましたよこの子。流石にイケボといつてもねつとりボイス過ぎたかな？

……氣絶しちゃつたけど、このまま耳かき続けますか。意外と楽しいねこれ。クセになる感触と小さな達成感の積み重ねが心地よい。今度他の娘達にもやつてあげよつと。

カリカリ……カリカリ……。

――――――――――

カーマちゃんの耳かきも終わつたけど、カーマちゃんは私のお腹に顔を埋めて離れないのとそのままに。ティアちゃんとジャックちゃんは2人して寝てしまつた。ちょうどティアちゃんがジャックちゃんを膝枕してなでなでする感じ。その状態でどつちも眠つていた。とても平和なひと時だ。エレちゃんは冥界管理で今この場に居ないけど、子供達と並んで川の字で寝るのも良いかもしれない。

「ふふふ……。おとうさん……それ、ボクも混ぜてくれるかなあ？」  
「そうじやのう。ワシらも混ぜて貰わねば拗ねてしまうやもしれんなあ」

ふと誰もいないこの場に響く2つの音色。

私はこの声を知っている。つていうか、もう2人共模倣し終わつたのね。結構早かつた気がする。

ようし！ いらつしやい！ メフィス！ フエレス！

念じた瞬間に現れた、赤と緑、2つの影。

赤い瞳、知性を窺わせる眼鏡を掛け、頭には小さな赤いクラウン、髪は右に流すサイドテール。顔の左半分を前髪が覆う所謂メカクレ属性を携えた全体的に赤色な子がメフィス。

緑の瞳、可憐さを見せる緑のイヤリングを付け、頭には緑色を基調としたブリム。メフィスと対照的に左に流すサイドテールに、右半分のメカクレ。全体的に緑色な子がフエレス。

彼女らは違う世界で創造主によつて作られた存在。「辺獄」という死後の世界の管理を行なつていた経緯があるので、私の混沌泥内の管理も出来そうと判断し、私なりの方法で生み出す事にした。この世界の「メフィストフエレス」とは全くの無関係である。……無関係だよね？ でも「悪魔」である点は一緒なはずなので、偏在する者としては同一である可能性もあるのか？

この娘達は私の知つてるストーリーだと主人公にちよつかい出して、主人公を泣かせて「理念」という、辺獄で涙が結晶化した物を集めると、嫌がらせキャラだったが、ここに現れた時の第一声で確信。そんなことしないよこの娘達！ 今もちよつとうずうずしてる感じするし！

でもその前にごめんねカーマちゃん。ちょっとティアちゃんの所に行つといてね。

ティアちゃんの所へ混沌泥を繋いでティアちゃんの膝に行くように調整。イメージはベルトコンベア。カーマちゃんが分からぬレベルで静かにティアちゃんのもう一方の膝へ運ぶ。

ティアちゃんもカーマちゃんも起きなかつたけど、ティアちゃんは寝ながら何か察したのか、少し微笑みを浮かべて静かにカーマちゃんの頭を撫でてる。ティアちゃんの母性スキルはパッシブスキルなん

やね……。

さて！ カーマちゃんも離れた事ですし。 2人もウズウズしてい  
るようですし。

「おいで！」

と一言。 その言葉を皮切りにこちらに飛び込んで来る2つの影。  
おおう突進速度半端ない。 でも大丈夫。 お父さんですので。  
ボスッと鈍い音と共に両側からお腹の辺りに抱きつく2人。 感無  
量と言つた感じで擦り付いている。 そのまま2人の頭をなでなで。  
2人ともちよつとビクンビクンしてる気がするけど、今は好きなよう  
にさせておこう。

なでなで。

「……ふふふ……。 このまま死んだらスッゴく幸せになれそお……」  
「中で少々見ておつたが、これ程までとはなあ……。 確かに中毒にな  
るのも領ける。 魔性じやな？ 父様」

なでなで。 わしやわしや。 なんで他人の髪つて触つてると気持ち  
いいんだろうね？ お父さん的にも楽しいのでwin winの関  
係なんですが、お父さんの場合中毒性が高すぎてやり過ぎるとダメにな  
つちやう（物理）ので、加減はしつかり考えないといけない。

……ちなみにある方向から恨めしそうな視線が1つ。

「むううううううううう……」

あんれまあ、カーマちゃん起きてらつしやるー。 私に構つてオーラ  
全開でいらつしやるー。

あえて気付かないフリをしましてー。

「思つてたより早く終わつたねえ。 1日2日くらいかかると思つてた  
んだけども」

実際ジャックちゃんがそれなりの時間経つてると思うから自然と  
そつちを基準に考えていた。 それとも最初に念じた加速が通じたの  
かな？

「ふむ。 父様の記憶でジャックの生まれも認識しておる。 しかし、ワ  
シ等がはよう生まれて欲しいと思つとつたのは父様じや。 多少早く  
てもおかしくは無いじやろう」

「ボクたちもねえ……おとうさんの思いに応えたい一心で、なるべく早く出てこれるよう頑張つたんだよお……？ もつといいつぱい褒めてえ？」

お父さんの為にとは、なかなか嬉しいことを言つてくれるなあ。現在進行形で独占欲を刺激された愛の神様がいるけど、そのうち爆発しないかとても心配なのですが、それはそれとしてこの子達も私の知つてる原作と比べて随分素直になつていて。

お父さんの混沌泥ケイオスタイド内部はお父さんに対する愛が自然と高まるようにでもできているのだろうか？ でもジャックちゃんは最初怖がつてたし。そこら辺はその子毎に相性みたいなのがあるのかな？

あと気になる点として、お父さんが望めば内部時間の加速が可能な点。内部時間加速だけなのか、他の時間変動系もできるのかは定かじや無いけども、やつてる事は結構やばい事。

今回カーマちゃんに施してた訓練自体を混沌泥ケイオスタイド内でできるかもしない上に、時間加速すれば数時間、あるいは数分でコレを終わらすことが可能かもしれない。

戦闘に関して言つても相手を隔離した空間内に閉じ込めて時間の流れを加速させれば、普通の人間だつたら餓死するだろうし、サーキュレーション等の存在でも単独行動系スキルが強く無い限りエネルギー切れに陥る事だろう。

どんどんお父さん自身が戦わずして無力化する方法が増えていつてる気がする。おお怖い怖い。

「そうだなー。メフィスとフェレスはこれからみんなのお姉さんとして中の管理をして貰う予定だしね。他の子と違つて構つてあげられる時間が少なくなるだろうし、いっぱい甘えていいんだぞ？」

なでなで。わしゃわしゃ。さらさら。

2人して「むふー」とした顔が可愛らしい。  
しかしコレをよく思わないのが約一名。

「ちよつと！ お父さん！ コイツらがお姉さんってどう言うことですか!? 説明を要求します！」

とうとう爆発した愛の女神様。もといカーマちゃん。

今の中でも目が覚めたのかティアちゃんとジャックちゃんもそもそも起き上がっている。ジャックちゃんは寝ぼけてティアちゃんのお腹に抱きついてスリスリしてるけども。自然と甘えてらっしゃる。尊いが過ぎるぞ。私が死んじゃう。

ちょうど起きたし紹介しておこう。

「はい、こちらの2人がお父さんの混沌泥<sup>ケイオススタイル</sup>内部の管理を担つてもらうメフィスちゃんとフェレスちゃんです！ 生まれた順番に関係なくみんなのお姉さんとして今後増えるであろう妹等のお世話などをしてもらいます！」と言った上でサクッと自己紹介でも

お父さんから離れ、左右対象に浮遊する2人。

「ふむ、ワシがメフィスじゃ。主に内部の部屋割りと父様との伝達を担当する予定じゃ。父様の内部は宇宙ほどとは言わんが、中々に広いのでなあ。妹等が迷子にならんようにするのじや。よろしくなあ」「ふふふ……。ボクがフェレスだよお？」基本的にはジャックちゃんのお世話係になるかなあ。妹が増えたとしても基本ボクが面倒見るからねえ。部屋に欲しいものとかあればボクが色々融通する予定かなあ……。おかあさんも、よろしくねえ」

自己紹介が終わつたのも束の間。

「私はコイツらがお姉ちやんだなんて認めませんからね！ 第一私はり後に生まれてるじゃないですか！ 順番は順番ですうー！」

そう言つて癪癩を起こしたカーマちゃんが訓練によつて体得した音速の一矢にて両方の脳天を狙う一撃を放つ。

放された矢の速度は音を置き去りにする速度で数百メートルもない距離に浮遊する2人へと飛来する。

しかし、カーマちゃんが訓練を経て得た力であつても、今回生み出した2人はすでに訓練するまでもなく元からしてお父さんの魔力でできた子達。それで落とせるほどヤワでは無かつた。

メフィスは眼前に迫った矢を地面から突如出現させた黒光りする鎖で受け、フェレスはどこからとも無く取り出した長剣を出現させ飛来する矢を先端から真つ二つにして見せた。

お父さんから生み出されたとあって半ば予想していた結果なのか、地団駄を踏んで威嚇するカーマちゃん。いつから君はネコになつたんだい。「フンシャー！」じゃないの。メフィスもフェレスも困った顔してるじゃないの。

「はいはーい怒らない怒らない。落ち着いてねー」

それを見てポンポンと慰めるティアちゃん。出会ってそこまで時間経つてないけど、カーマちゃんもティアちゃんとの親和性高いよね。撫でられながらキツとした目を向けられても可愛いだけだぞカーマちゃん。

「まあまあカーマちゃんも落ち着いて。基本この子達は内部管理がメインになるから、カーマちゃん自身のお父さん占有率は高めを維持してるからね。むしろメフィスちゃんとフェレスちゃんの方がカーマちゃんに嫉妬しそうなレベルなんだよ？」

「そうじやなあ。今後はいつ出てこれるかも定かではないし、ずっと外で出ていられるお主が羨ましくて仕方がないのぉ」

「くふふ……欲張りさんだねえカーマちゃん？」

なんて事を言いながら空中で寝転がる姿勢でカーマちゃんの頭を撫でる2人。眼前に癪癩を起こした妹扱いでカーマちゃんがプルプルしてらつしやる。

「子供扱いするなあああ！！！」

「ほれほれ。そうやつて癪癩を起こすようでは、いつまで経つても姉は名乗れんぞ？」

「可愛いねえ、カーマちゃん？　くふふふふ……」

完全に2人の掌の上である。自分で言つた手前どうかと思つてた

けど、カーマちゃんが子供状態でお姉ちゃんはやつぱりダメみたいですね。

カーマちゃん的には不本意だろうけど、娘達の相性は悪くないようで何より。

これで今後の混沌泥ケイオススタイル内部の事は彼女達にお願いして色々やつてもらう事に。内部構造に関しては彼女達に一任することにする。好きにやつちやつといいでー。